堀金村の埋蔵文化財第１集

神沢遺跡
田多井古城下遺跡
そり表遺跡

1988・3

堀金村教育委員会

堀金村の埋蔵文化財第１集

神　沢　遺　跡
田多井　古城下遺跡
そ　り　表　遺　跡

1988・3

堀金村教育委員会

序

多くの方々の文化財保護に寄せる熱意と、惜しみなく払われた汗の力によって、当村が今回予定した埋蔵遺跡の発掘及び試掘調査が終了し、今この報告書を各位の膝下にお届けできる運びになったことは、大きな喜びであり心より感謝の念を捧げる次第である。

私たちの村堀金の里は、東西に長く、南北との比が凡そ３：１の割合の長形を呈しており、村の総面積の65％に当る西部地域の一帯は、常念岳（2857 m）・蝶ケ岳（2,664 m）・大滝山（2,615 m）・鍋冠山（2,194 m）などの峯の連なる日本北アルプスの前衛ともいうべき山脈を背にした山林地帯である。これに対して東部地域は、烏川・黒沢川・鳴沢等西部山地より流れ出す幾つかの沢によって作られた扇状地上に、緩い傾斜をもって東面に展けた畑地と、豊かな水田耕作地が広がっている。近年、安曇野公園の整備がさかんに喧伝されているとおり、自然環境のまことに勝れた素晴らしい村里である。また、西部山麓一帯は、遠く原始の昔より快適な人類の生活地として開け、古代の遺跡も多く、香り高い歴史や文化遺産の秘められた地でもある。

今回のこの調査の一帯は、明治の頃より土器など遺物の表面採集によって埋蔵遺跡の確認がなされておったところであり、神沢（しんざわ）の地は普通林道神沢線建設工事の進めによって損壊のおそれがあるとし、小倉田（そり表）の試掘及び古城下（田多井城主居館趾附近）発掘は、三田地区県営圃場整備事業の計画範囲となって調査の必要を迫られた地域である。

この調査に当っては、奈川小学校勤務の山田瑞穂教諭を団長とする調査団を急処結成し、県教委文化課太田・小林両指導主事・埋文センター百瀬調査研究員の方々のご指導を仰ぎながら、役場関係課職員・文化財専門審議委員・民俗資料調査委員等20有余名の皆さんから休日連続返上や秋の多忙な農事のやりくりなど、実に献身的なご奉仕をいただきながら調査に当っていただいた。

この調査結果が本村の生いたちを解明するための貴重な資料となり、今後の村発展のこれまた重要な基礎資料となることは確実なことであって、大きな財産として誇り得るものと確信するものである。

この調査に関係して、なみなみならぬご努力をいただいた上記の皆様方はじめ、関係機関の方々、さらに報告書の作製に心魂を傾けて尽力くださった方々のご労苦に深甚なる感謝と御礼を重ねて申し上げるものである。

昭和63年３月

堀金村教育委員会教育長　　青柳　安昭

例　　言

1　本書は、三田地区県営圃場整備事業および田多井神沢地区普通林道開設事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡名は、周知の「神沢遺跡」、「そり表遺跡」とあらたに遺構の発見された「田多井古城下遺跡」とした。

3　調査は、掘金村教育委員会が調査団を組織し実施した。

4　本書作成における分担は下記の通りである。

遺構図整理・トレース	百瀬・野村・寺内
遺物整理	百瀬・堀金村郷土史研究会
遺物実測・トレース	百瀬・野村・寺内
写真	百瀬・矢ヶ崎

なお、遺物整理・遺物実測・写真については長野県埋蔵文化財センターの青沼博之・百瀬長秀・原　明芳・望月　映・大竹憲正・石上周蔵各氏の御協力・御助言を得た。記して感謝申し上げたい。

また、土器実測の一部は中央航業株式会社による写真実測を行なった。

5　本書の執筆・編集は主として百瀬が行ない、山田が監修した。執筆分担については各文末に明記することにより文責を明らかにした。

6　調査の諸記録および遺物は、堀金村教育委員会において保管されている。

7　掲載した実測図は次の縮尺による。

遺構	1：60
遺物　土器	1：4（拓影　1：3）
石器・石製品	1：2

8　古代の土器実測図中、須恵器・灰釉陶器は断面を塗りつぶし、黒色土器はスクリーントーンで示した。

目　　次

序
例言

神沢遺跡
第１章　発掘調査の経過
第１節　調査にいたるまで……1
第２節　調査体制……2
第３節　調査の経過……3
第４節　調査の方法……4
第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境……5
第２節　歴史的環境と村内の遺跡……5
第３章　遺構と遺物
第１節　層序……7
第２節　出土遺物……7
第４章　結語……9

田多井古城下遺跡
第１章　発掘調査の経過
第１節　調査にいたるまで……11
第２節　調査団の組織……11
第３節　調査の経過……11
第４節　調査の方法……11
第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境……12
第２節　歴史的環境……12
第３章　遺構と遺物
第１節　層序……14
第２節　遺構
１）　１号住居址……14

2）　2号住居址……14
3）　3号住居址……17
4）　1号掘立柱建物址……18
5）　1号土壙……20
6）　2号土壙……20
7）　3号土壙……20
8）　4号土壙……20
9）　5号土壙……20
10）　1号溝址……21
第3節　遺構外出土の遺物……22
第4章　結語……23

そり表遺跡

第1章　発掘調査の経過
第1節　調査にいたるまで……25
第2節　調査団の組織……25
第3節　調査の経過……25
第4節　調査の方法……25
第2章　遺跡の環境
第1節　地理的環境……26
第2節　歴史的環境……26
第3章　遺構と遺物
第1節　土層堆積の状況……27
第2節　遺構と遺跡の広がり……28
第3節　出土遺物
1）縄文時代……29
2）弥生時代……32
3）平安時代以降……33
4）既出資料……33
第4章　結語……35

挿 図 目 次

図 1　遺跡の位置と調査範囲……1
図 2　調査地点および付近の地形……4
図 3　堀金村の遺跡分布……6
図 4　基本層序……7
図 5　出土土器拓影……8
図 6　発掘範囲と遺構配置……12
図 7　1号住居址実測図……14
図 8　2号住居址実測図……15
図 9　2号住居址出土土器実測図……16
図10　3号住居址山土遺物実測図……17
図11　3号住居址・1～3号土壙実測図……18
図12　1号掘立柱建物址・4・5号土壙実測図……19
図13　1号溝址位置……21
図14　1号溝址断面……22
図15　試掘坑およびトレンチの位置……26
図16　試掘坑の土層堆積状況……27
図17　時代別推定遺跡範囲……28
図18　出土土器拓影(1)……29
図19　出土土器拓影(2)……30
図20　出土石器実測図(1)……31
図21　出土石器実測図(2)……32
図22　弥生式土器実測図……32
図23　既出土器実測図(1)……33
図24　既出土器実測図(2)……34

神沢遺跡

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査にいたるまで

本調査は、三田地区県営ほ場整備事業および田多井神沢地区普通林道開設事業にともなう埋蔵文化財緊急発掘調査である。

ほ場整備事業に伴う発掘調査では、当初当該遺跡が指定外であるため、簡単な試掘調査のみを計画していたところ、ほ場整備の区域が田多井氏の居館趾といわれる古城下まで広がり、この地点に竪穴住居址などが発見されたため、県教委文化課の太田・小林両指導主事に連絡、緊急発掘調査を進めたところである。

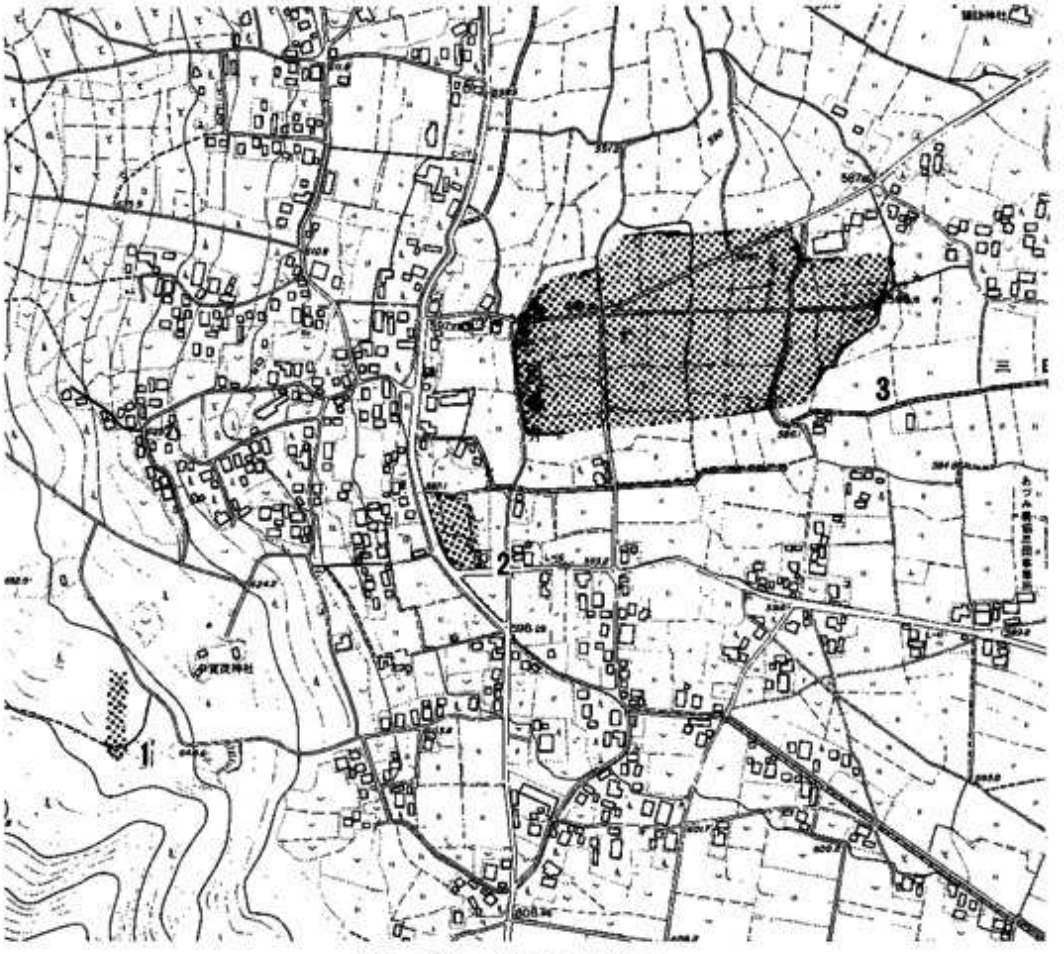


図１　遺跡の位置と調査範囲

１　神沢遺跡　　２．田多井古城下遺跡

３．そり表遺跡（１：10,000）

なお、そり表・なかじま地区については、昭和63年度事業のため今回は試掘だけにとどめた。また、神沢遺跡については、林道工事予定地の発掘を進めたが期待していた住居址などは検出できず、縄文時代のものとみられる土器片が少量出土したのみである。

下記に発掘にいたるまでの経過の記録を掲げた。

昭和57年8月4日　埋蔵文化財保護協議を村役場および現地にて実施
　　出席者　県教委文化課臼田指導主事、中信土地改良事務所西山主事、村教育委員会および耕地課

昭和59年9月28日　そり表埋蔵文化財試掘についての協議を村教委事務室で実施
　　出席者　県教委文化課小林指導主事、村教育委員会

昭和62年4月28日　田多井神沢普通林道開設工事にともなう保護協議を現地にて実施
　　出席者　県教委文化課太田・小林指導主事、村教育委員会

6月5日　神沢遺跡発掘通知提出

7月10日　そり表遺跡発掘通知提出

9月18日　そり表遺跡・なかじま遺跡試掘通知提出

第2節　調査体制

・事務局　事務局長　青柳　安昭（堀金村教育長）
　　丸山　繁雄（同　　前教育長）
　　会計主任　山崎　宏子（堀金村教育委員会）
　　幹　　事　丸山　一郎（　　〃　　）
　　〃　　矢ヶ崎記久（　　〃　　）

・調査団　調査団長　山田　瑞穂（日本考古学協会員・奈川小学校教諭）

・発掘参加者（順不同）　丸山冨士雄、　田口　五郎、　小平　重徳、
　　藤原　賢一、　宮下　一男、　片桐　勝市、
　　黒岩喜美次、　山口　信夫、　山口　和子、
　　徳武　一男、　丸山　敏文、　大竹　憲光、
　　青柳　精一、　両角　次男、　臼井嘉志子、
　　長瀬　吉雄、　高橋　尉周、　鹿川　勝一、
　　古簇　　昇、　青柳　光英、　大林　育造、
　　中村　信次、　細川　繁男、　米倉美千代、
　　宮沢　英昭、　丸山　　潔、　臼井　長男、
　　唐沢　和樹

調査指導者　小穴　芳実（信濃史学会委員長・村誌編纂委員会専門調査員）
島田　哲男（大町市教育委員会）
森　　義直（大町高等学校）
百瀬　新治（長野県埋蔵文化財センター）
寺内　隆夫（　　〃　　）
野村　一寿（　　〃　　）
西牧　尚人（　　〃　　）
唐木　孝雄（　　〃　　）
市川　隆之（　　〃　　）

第3節　調査の経過

62．7．11(土)　そり表西地区調査開始。重機によるトレンチ9ケ所設定
曇　調査員　山田他3名。作業員　小平他18名。
7．18(土)　神沢クイ打ち作業、テント設営。
曇一時雨　調査員　百瀬他2名。
7．19(日)　神沢発掘作業開始。重機による排土、掘り下げ。
曇のち雨　調査員　山田他1名。作業員　丸山(敏)他15名。
7．25(土)　神沢掘り下げ。全体図作成、作業終了テント撤収。そり表試掘調査。トレンチ
晴のち曇　設定。
（神沢）山田他1名。作業員　丸山(敏)他15名
（そり表）百瀬他2名。作業員　丸山(冨)他16名。
10．3(土)　田多井古城下調査開始。重機による排土。掘り下げ。2住、掘立柱検出。
快晴　調査員　百瀬他1名。作業員　宮下他14名。
10．4(日)　昨日の継続。トレンチ設定。溝検出。3住検出。全体図作成。
快晴　調査員　山田他2名。作業員　宮下他18名。
10．11(日)　古城下調査。平面図作成。そり表地区試掘。土層図作成。
晴のち曇　調査員　山田他1名。作業員　丸山(冨)他15名。
10．18(日)　そり表地区試掘。土層図作成。古城下遺跡公開約100名参加。
快晴　調査員　百瀬他1名。作業員　丸山(冨)他17名。
10．24(土)　そり表試掘調査。土層図作成。作業終了、検討会。
曇のち雨　調査員　百瀬。作業員　小平他19名。　（矢ケ崎記久）

第４節　調査の方法

調査該当地域は、針葉樹の林をうねるように曲がって設けられる幅約５ｍの林道建設予定地内である。また、森林内であるため遺跡の範囲が明確になっていないことから、建設林道の中央線を基準に10ｍおきにグリットを設定し、まず遺跡の範囲を確認することにした。グリットは２ｍ四方とし、遺構・遺物の検出状況により拡張区を設定していくことにした。

さらに、調査該当地域から南に外れるが、過去の調査で遺跡が広がっていると考えられる場所２ヶ所に同様のグリットを設けた。グリットの番号は南から付し、No.01から10までとなった。調査地域内で遺物の出土したNo.03グリットは拡張区を設定した。

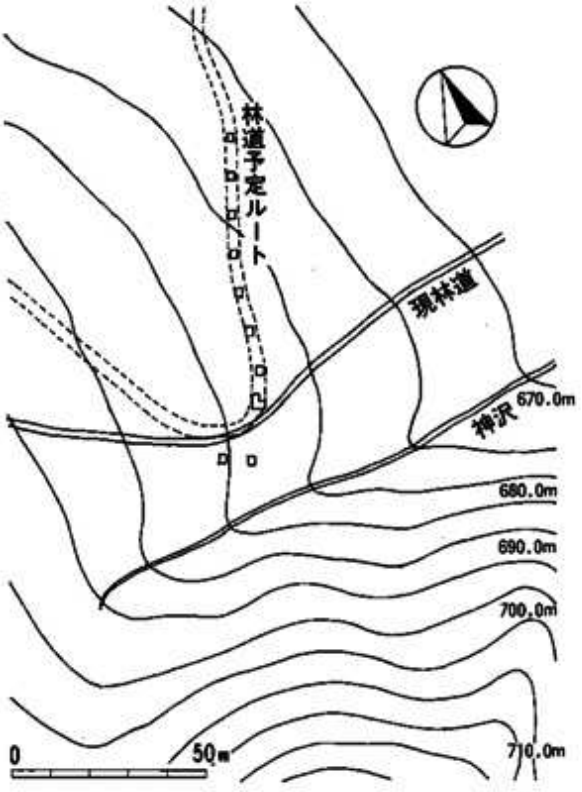


図２　調査地点および付近の地形

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

堀金村は松本平のほぼ中央西側に位置し、東向き扇状地傾斜面に展開する。村の西側にそびえ立つ北アルプスの急峻な山々から流れ下る谷川は、大小の扇状地を形成してきた。今回の調査場所である田多井地区も、烏川および黒沢川扇状地に南北から挟まれる扇状地端部のやや低い部分の上に、西側から流れ下る深沢をはじめとする沢水でつくられた小さな扇状地が複合してできた、東向き傾斜面に立地している。

神沢遺跡は、田多井集落を見下す扇頂部に位置し、すぐ南側を神沢が細い沢となって流れ下っている。古域下遺跡は、田多井集落のほぼ中央急斜面から緩斜面への地形変換点付近に広がる。西の山上に田多井城址を望むことができ、東は平坦な水田地帯につながる。その水田地帯一帯に展開するのがそり表遺跡である。谷川の水を集めた深沢が一番低い部分を東流しており、湧き水が何か所かに見られる。

第２節　歴史的環境と村内の遺跡

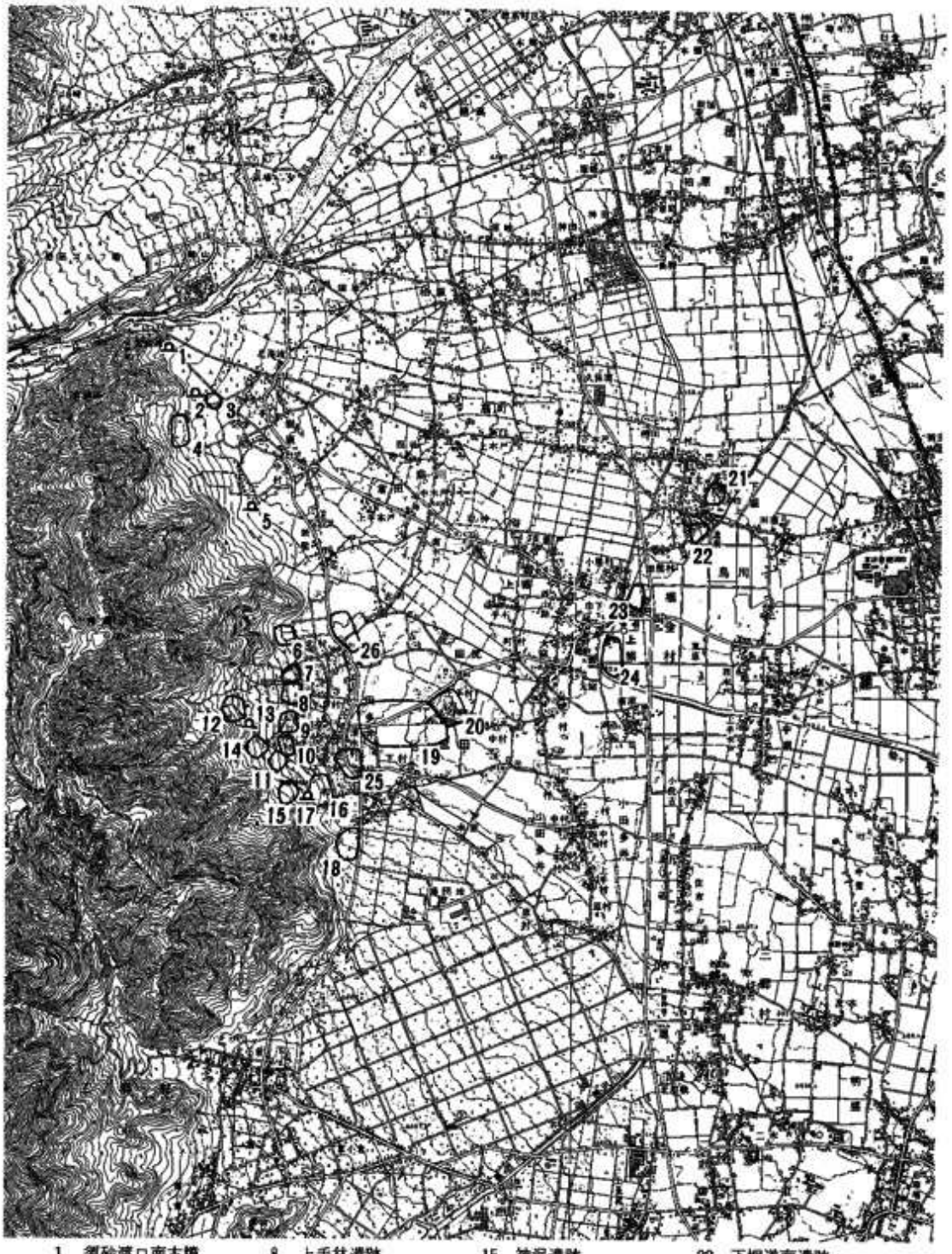
堀金村で一番古い時期の遺跡が存在するのも田多井地区である。神沢遺跡のすぐ北に位置する上手林遺跡（８）石見堂遺跡（９）からは縄文時代早期・押型文土器が出土している。西側の山腹にある東峠でも同時期の遺物が拾われている。また、縄文時代前期の土器片が石見堂遺跡などでわずかに見られる。中期にはいると、そり表遺跡（19）なかじま遺跡（20）巾上遺跡（４）など、山麓にかなりのたくさんの遺跡が出現し、竪穴住居址も発見されていくつかの集落が存在したことが想定される。後・晩期の遺跡としては、神沢遺跡（15）をはじめ石剣がまとまって出土した山の神下遺跡（６）が知られている。

弥生時代の遺跡としては、おもそう遺跡（７）からの打製石包丁の出土があり、そり表遺跡の西端弁天池付近から赤色塗彩された土器片が出土したとの記録があるのみで、内容は明らかになっていない。

古墳時代にはいると、山麓の群集墳として、岩原前の髪古墳（５）田多井では古城下古墳（17）など数基の古墳が確認されているが、集落遺跡などは今のところ見つかっていない。

奈良・平安時代にはいると、数軒の竪穴住居址が発掘調査された岩田天神南遺跡（24）、土木工事の際に竪穴住居址がみつかった田多井おもそう遺跡（７）下堀道南遺跡（22）をはじめ、いくつかの地点で同時代の遺物が拾われている。

中世では、田多井氏居館跡・田多井城址・岩原城址・上堀と下堀にある堀を巡らした屋敷跡や烏川谷入の牧場跡や栃平屋敷跡などたくさん知られているが、内容は明確になっていない。



1．須砂渡口南古墳
2．岩原古墳
3．岩原遺跡
4．巾上遺跡
5．前の髪古墳
6．山の神下遺跡
7．おもそう遺跡
8．上手林遺跡
9．石見堂遺跡
10．上の原Ｂ遺跡
11．上の原Ｃ遺跡
12．曲尾遺跡
13．曲尾古墳
14．ろーくぼ遺跡
15．神沢遺跡
16．加茂神社南遺跡
17．古城下古墳
18．和合田遺跡
19．そり表遺跡
20．なかじま遺跡
21．十兵衛屋敷遺跡
22．下堀道南遺跡
23．大つま(農協前)遺跡
24．岩田天神南遺跡
25．田多井古城下遺跡
26．田多井北村遺跡

図３　堀金村の遺跡分布（１：50,000）

第３章　遺構と遺物

第１節　層　　序

本調査地区における土層は図４に概念図として示したとおりである。Ⅰ層―腐食土、Ⅱ層―黒褐色混礫土、Ⅲ層―黄褐色混礫砂質土、Ⅳ層―混礫ローム、の４層に基本的に分層される。Ⅱ～Ⅲ層では、場所により濃淡があるものの、最大径30～70 cmの角礫がかなり混入しており、現在も続いている神沢の氾濫による押し出しと考えられる。

遺物を包含する層位はⅡ層であり、南側ほどⅡ層の堆積は厚くなっている。また、東側へもⅡ層の厚い堆積が拡がっており、テラス状の傾斜の緩やかな部分につながっている。遺構は認められなかったが、遺物が多出したⅡ層の堆積の厚い南端付近からさらに南東のゆるい傾斜面に遺構の存在する可能性は高い。

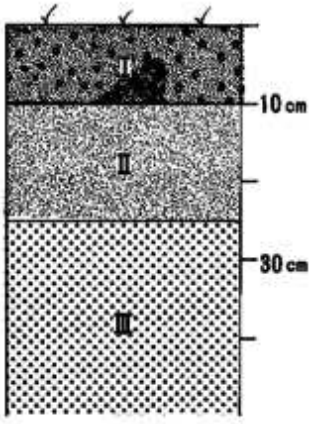


図４　基本層序

第２節　出土遺物（図５）

遺物の出土は南端のNo.01～03グリットのみであった。出土した遺物のすべてが土器片である。全体に微細な破片が多く、一部には摩耗の進んだものもあった。さらに、破片のほとんどは無文土器であり、時期を特定できる土器片は限られている。有文土器を時期別に細分すると、縄文時代後期中葉から後葉のものが大半であり、若干の晩期土器片が出土している。以下時期を追って考察してみたい。

後期中葉加曽利Ｂ式に比定される土器（１～５）がある。頸部を屈曲させて大きく開口する深鉢型土器であり、頸部から胴部に横方向の羽状沈線が施される土器や（１・２）口縁部に横方向の沈線による文様帯を施すもの（３）がみられる。４は横帯の縄文と連続対弧文が組み合わされており、内外面をていねいに調整している。そろばん玉状に張り出した胴部をもつ古い段階（加曽利Ｂ１・２式期）の小形精製土器である。同じく弧状沈線によって区画された内に縄文を施す土器（５）は新しい段階（加曽利Ｂ３式期）の、頸部に屈曲をもたない深鉢型土器であろう。

内屈する口縁部に横位の文様帯をつくり、瘤を貼付する深鉢土器（６）は加曽利Ｂ３式期から高井東式期の土器であろう。

晩期に属する土器が二点（７・８）ある。７は口縁端部に独特の沈線で加飾し、内面に一条の沈線をほどこす、晩期初頭に位置する深鉢型土器である。また、粗大工字文の施された深鉢は佐野Ⅱ式に比定されよう。

９・10は帰属の明確にならなかった土器である。10は棒状工具で弧状の沈線を連続させており、

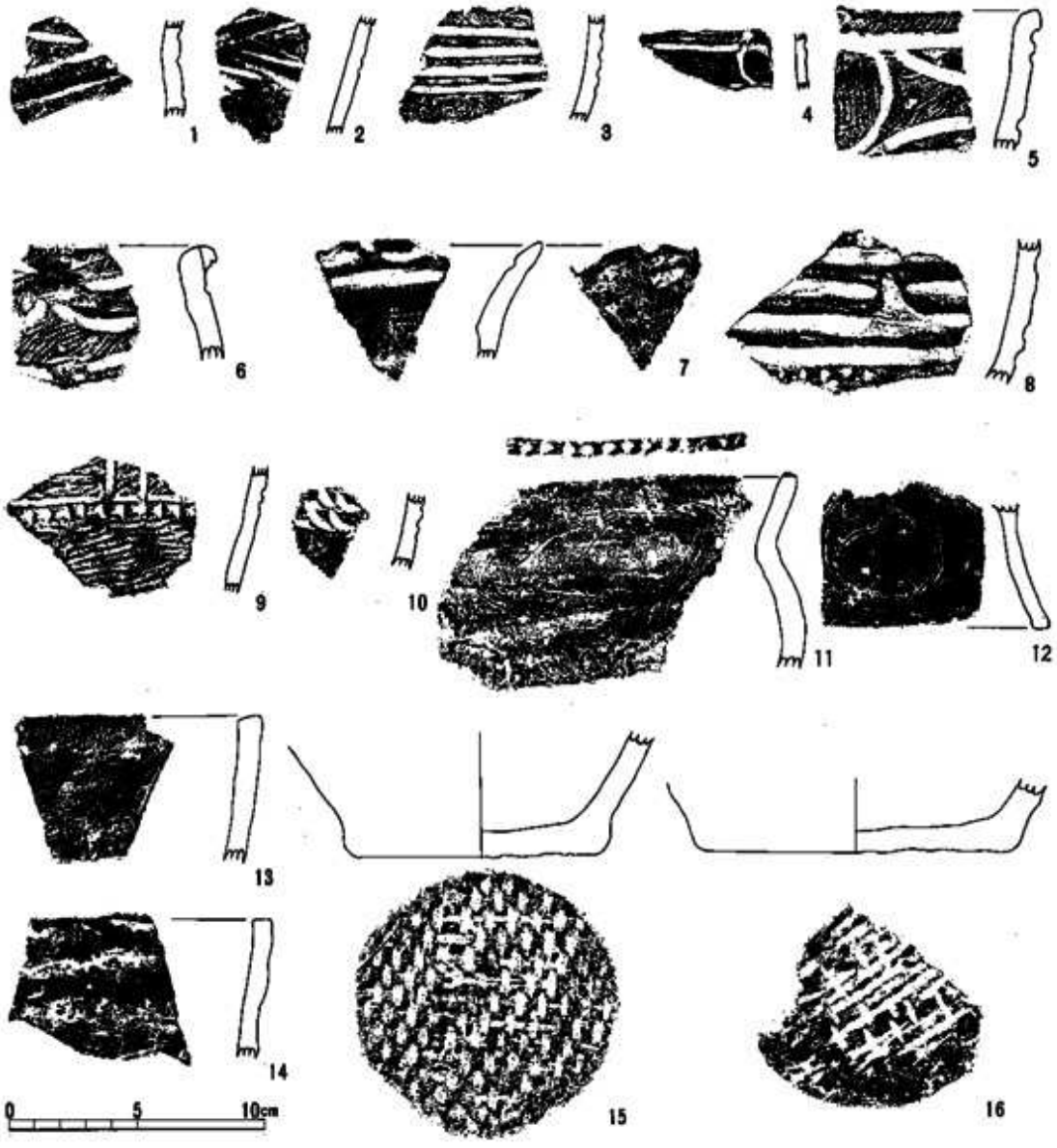


図5　出土土器拓影

岐阜県方面との関係を考えてみる必要がありそうである。

最後に出土土器の大半を占める無文土器を一括した（11～16）。口縁部に刻みを施すもの（11）や台付土器（12）もみられるが、平坦な口縁をもつ深鉢（13・14）が大多数である。積み上げ痕が見えるほど凹凸の多い表面にミガキに近い調整を施すものが目立つ。しかし、台付土器を含め、網代痕を残す底部などは、有文土器の一部の可能性もある。　（百瀬新治）

第4章　結　　語

神沢遺跡は昭和30年代にトレンチによる発掘調査がなされ、河西清光・太田喜幸両氏によって村教育委員会発行の郷土誌に略報告がなされている。それによると、山中で採石がなされた時に遺物が出土し、そこを中心にトレンチを十字に入れての調査がなされた。しかし、針葉樹の大木に囲まれている現地は、今日では発掘地点が不明になっており、関係者の記憶をもとにほぼ発掘地点に近いと考えられる位置に標柱が建てられている。

今回の林道建設にともなう発掘調査の地点は、この標柱の北側で迂回するように大きくカーブする道路の部分であった。林道用地内を踏査すると大小の礫が地表に露出している場所が多く、かつての神沢の氾濫の激しさを想い起こさせてくれている。このような巨木と岩のなかでの発掘調査では、その間を縫うように設定したグリットで行うことが効率的と考え実施した。

調査の結果は、調査区域の南端から、標柱をはさんで南側に遺物包含層が確認されたが遺構は検出されなかった。以前の調査でも遺構は検出されていないので、遺跡の性格などは依然明らかにならないという結果に終った。しかし、標柱の南側の、傾斜の緩やかなテラス部分に近ずくにつれて遺物包含層が厚くなり、遺物の出土量が多くなる傾向から、遺跡の中心および範囲がほぼ特定できたことは、今後の調査に大きな期待を持たせる成果といえよう。さらに、テラス部分では湧水が認められるので、この場所の調査がこれから注目される。

また、出土土器は、従前の調査で縄文時代後期の遺物が認められていたが、今回の調査では後期中葉から晩期前半にかけての遺跡であることが明確になった。松本平では、人骨の大量出土で注目される明科町北村遺跡や配石をともなう大遺跡である離山遺跡などとほぼ同時期の遺跡と考えられ、その意味でも山中の遺跡とはいえ神沢遺跡は重要な位置を占めるものと思われる。

最後に雨天という悪条件での調査にもかかわらず、熱心に御協力くださった参加者の皆さんに深く感謝を申し上げる。

（山田瑞穂）

田多井 古城下遺跡

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査にいたるまで

神沢遺跡に同じ

第２節　調査団の組織

神沢遺跡に同じ

第３節　調査の経過

神沢遺跡に同じ

第４節　調査の方法

田多井氏居館跡の伝承のほか、遺跡の内容が全く明らかになっていないこと、遺跡の範囲が不明であることなどから、傾斜面にほぼ並行する方向で３本のトレンチを入れ、土層堆積状況および遺構の状態をまず調べることにした。各トレンチの間を約10ｍ、トレンチの幅を３ｍで設定した。

トレンチ調査の結果、遺構検出面が比較的深いことなどから、ほ場整備による破壊は少ないと判断して、トレンチにかかった遺構のみ拡張区を設けて調査し、他は土盛りなどで保護する方法をとった。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

全体的な環境については、神沢遺跡の項で述べたので、ここでは遺跡の周辺に限って概観する。いわゆる田多井氏居館跡とされる場所は、『との畑』と呼ばれる周りより小高い畑１枚分である。そこから望む城址は、山頂の城山は西方はるかに高く山腹の古城址は南西上方距離約300ｍの神社境内にある。遺跡の西側は道路と用水路(新堀堰)によってかなり現地形が変化していると思われる。居館跡の北約100ｍに深沢が東流しており、その北は南向きの緩やかな斜面となって「そり表遺跡」に続いている。東および南は扇状地の北向きスロープが広がるが、集落の中に入るので遺跡の範囲などは明確にならない。

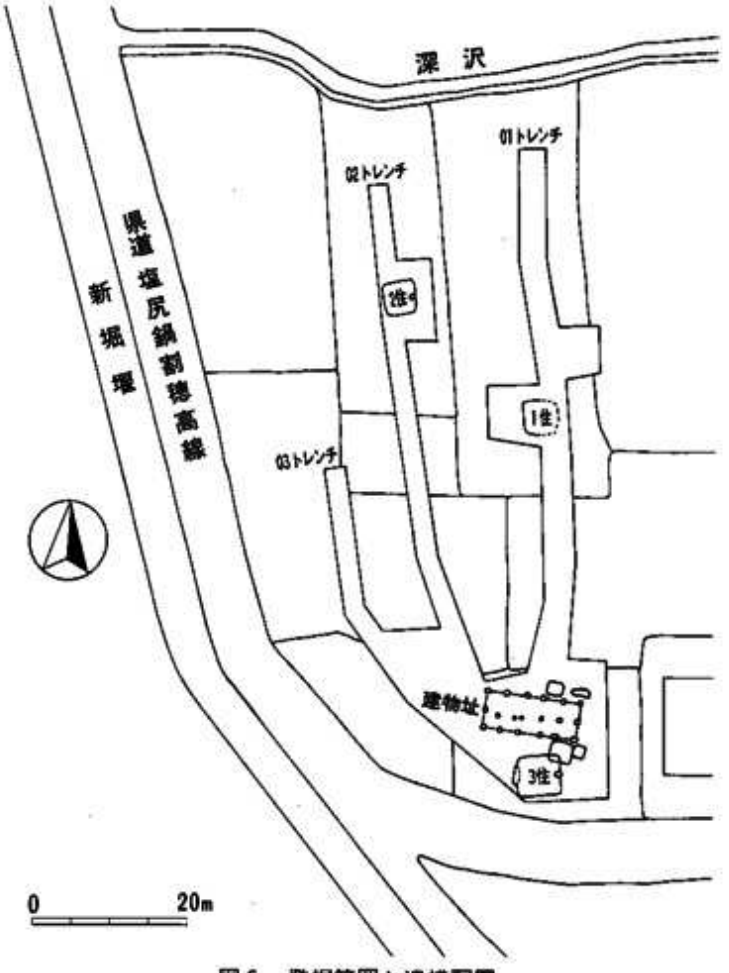


図６　発掘範囲と遺構配置

第２節　歴史的環境

平安時代以前については「神沢遺跡」および「そり表遺跡」の項で扱ってあるので、中世特に田多井氏と田多井城址に関係することを中心に記したい。なお、田多井氏関係の歴史については南安曇郡誌などを通しての小穴芳実氏の一連の研究があり、参照させていただいたりご教示を受けた部分が多い。

前述したように、田多井には新旧二つの城址がある。古城址は田多井集落の南西側に張り出す尾根の前面と背後を断ち切って構築されている。空堀と土塁とに囲まれた20×30ｍ程の本城の平

のうちには、さらに一段と高い小丘があるが、これは古城下古墳のマウンドを利用しての施設である。のちに構築されたとされる田多井城址は、金比羅山の北東に突き出した尾根上にあって、海抜840 m と古城址よりは相当高い位置にある。城山へはどの方向から登っても急峻であるが、その斜面には13個の帯郭が認められるという。

山麓に広がる田多井の集落は湧水が豊富で、田多井の地名もこの湧水から起こっているという。この湧き水や沢水を利用しての水田が弥生時代より開かれて、田多井の集落が形成されたと考えられるが、地名および地割に注目すべき点が多い。すなわち、田多井の集落の東方には東西方向に軸線を合わせて直進する道路を中心に、方画の地割がみられるのである。小規模ではあるが一町四方に区画された地割は、全部で6坪ほどが認められるという。地割にともなう地字には、佃・まゆみ（馬忌み）田・はんしょう（番匠）田・広田・前田・しょうじ（庄司）屋敷など、中世に起源を求めることのできそうなものが多い。この地割の南西隅に田多井氏居館跡に比定される「との畑」の地名が残っており、今回の調査地区となった。

最後に、居館跡の主とされる田多井氏に触れておく。信府統記によると、田多井城主に田多井大隅の名が見えるが、他の文献には出てこない。天正7年の上諏訪造宮帳には、上野郷の造宮所役徴収官として田多井安右衛門尉の名が見られる。武田氏の支配下にあって、田多井氏が安曇の豪族西牧氏の勢力圏に本拠を移していく事情などは明確になっていないが、武田氏被官としての堀金氏の勢力の伸長、武田の軍門に下り西牧氏の目付け的な立場に組み込まれていく田多井氏などを考えてみる必要があろう。

（百瀬新治）

第3章　遺構と遺物

第1節　層　　序

土層は基本的に三分層される。上面から、Ⅰ層・耕作土（黒褐色粘質土）、Ⅱ層・漸移層（暗褐色混ローム土）、Ⅲ層・ソフトロームにきれいな水平堆積をみせている。きわめて淘汰の良い粘質土で、礫などの混入はほとんど見られない。水田造成の際の削平によって、特に第Ⅱ層の厚さが場所によって大きく変化する。また、谷川の押し出しの砂礫がレンズ状にブロック堆積している場所がある。

第2節　遺　　構

1）1号住居址（図7）

01トレンチの断面精査の際に、Ⅲ層（ローム）上面でⅡ層（暗褐色土）の落ち込みが確認され、拡張区を設けてプランの検出を行なった。その結果、一辺約4 mの方形を呈することがわかったが、東側はトレンチによって削平されてしまい、わずかに南東コーナーらしき部分が確認できたにとどまった。壁高は10～15 cmを測るが、もっと高い位置から掘り込まれていた可能性が強い。床は地山のローム上面を平坦にして、かなり硬く叩きしめている。カマドなどの構築物は検出できなかったが、壁の外側約50 cmの位置に径5 cm程の小ピットがほぼ等間隔に検出され、これが本遺構と何らかの関係をもつかもしれない。

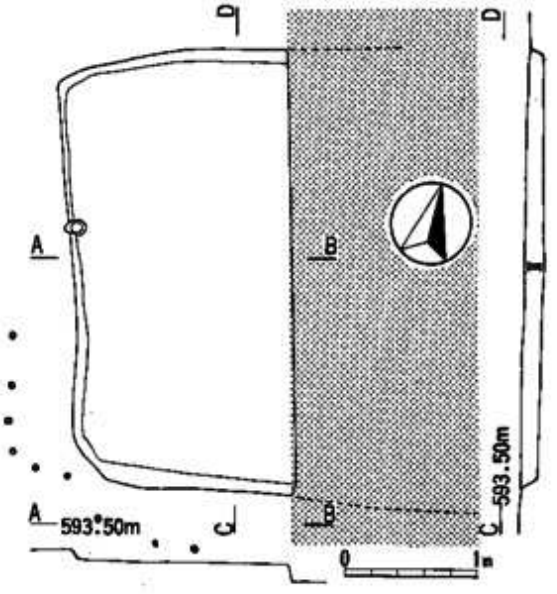


図7　1号住居址実測図

出土遺物はきわめて少なく、中央やや西寄りの床面上から、中世施釉陶器の細片1点と鉄片ひとつが出土したのみである。中世の、いわゆる竪穴状遺構と理解したい。

2）2号住居址（図8、9）

02トレンチ北側部分で、ローム層中にロームブロック混暗褐色土の落ち込みとして検出した。4.8 m×4.5 mの長方形プランであり、東壁がやや東に張り出し、西壁に崩落がみられる。カマド

は東壁中央に位置し、火床と袖が検出できた。火床は床面をやや掘りくぼめており、全体に良く焼けて焼土がしっかりと残っていた。両袖の位置には袖構築材として使われたらしいロームの多く混じった暗黄褐色土が残存していた。袖土の上や周囲には焼けた花崗岩を含む礫が散在し、石組カマドの可能性が高い。奥壁はゆるやかに立ち上がるが、煙道は検出できなかった。床は地山のロームを直接使っているようであるが、カマドの前を除いて硬い部分は認められなかった。床面に部分的ではあるが焼土が薄く遺存している。床下からいくつかのピットが検出されたが、不整形なものが多く、柱穴などの施設なのか掘り方なのか判然としなかった。

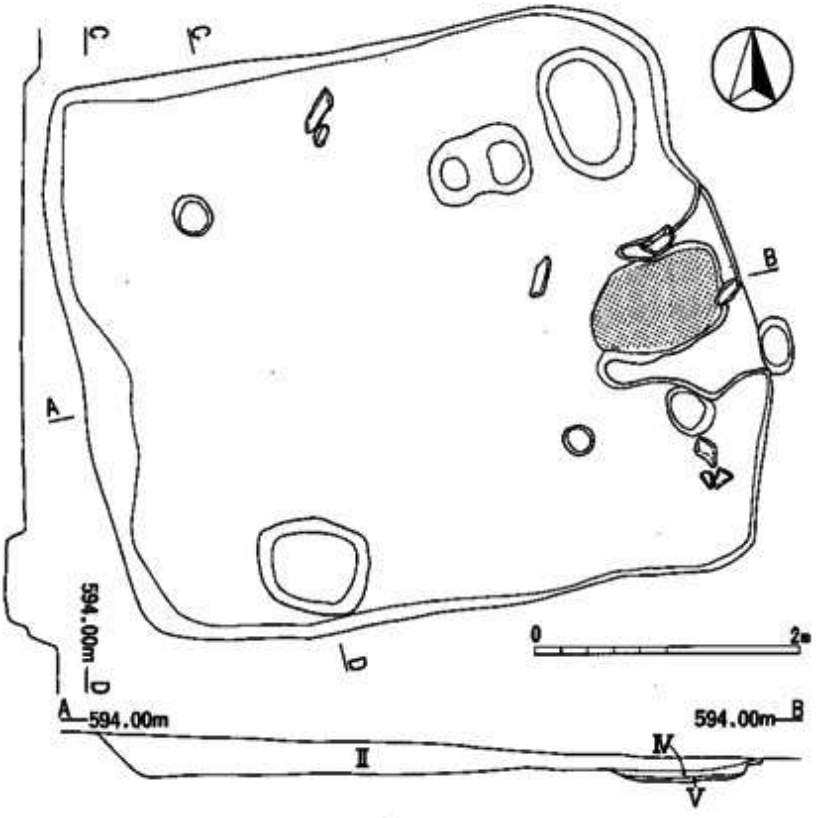


図8　2号住居址実測図

床面上から、完形土器を含むまとまった遺物の出土が見られた。そのほとんどは、カマド両袖脇から焚口にかけてであり、床面に正位で置かれているような状態のものが多い。中央部の床面上からも須恵杯と黒色土器A杯が1個体づつ出土している。南西部のピットと西壁際からは鉄製品（刀子）が出土した。

出土土器を概観する。食膳具は1から12である。1から7は焼物の種類は異なるが、杯AIIに分類できる。焼物の種類は1から2が土師器、3から6は大きくみると須恵器に分類できるが、軟質灰白色で黒斑を持ちところどころ灰褐色の部分もみられ、土師器に非常にちかい焼成である。また1から6の調整は共通しており、ロクロで大きく調整したのち内面をコテ状の工具で仕上げている。ただし底部の中心部分はコテがあたっていない。コテの使用のためか両者の形態もよく似ており、内面の底部と体部の境は明瞭につくられず、大きく弧を描くようである。7は黒色土

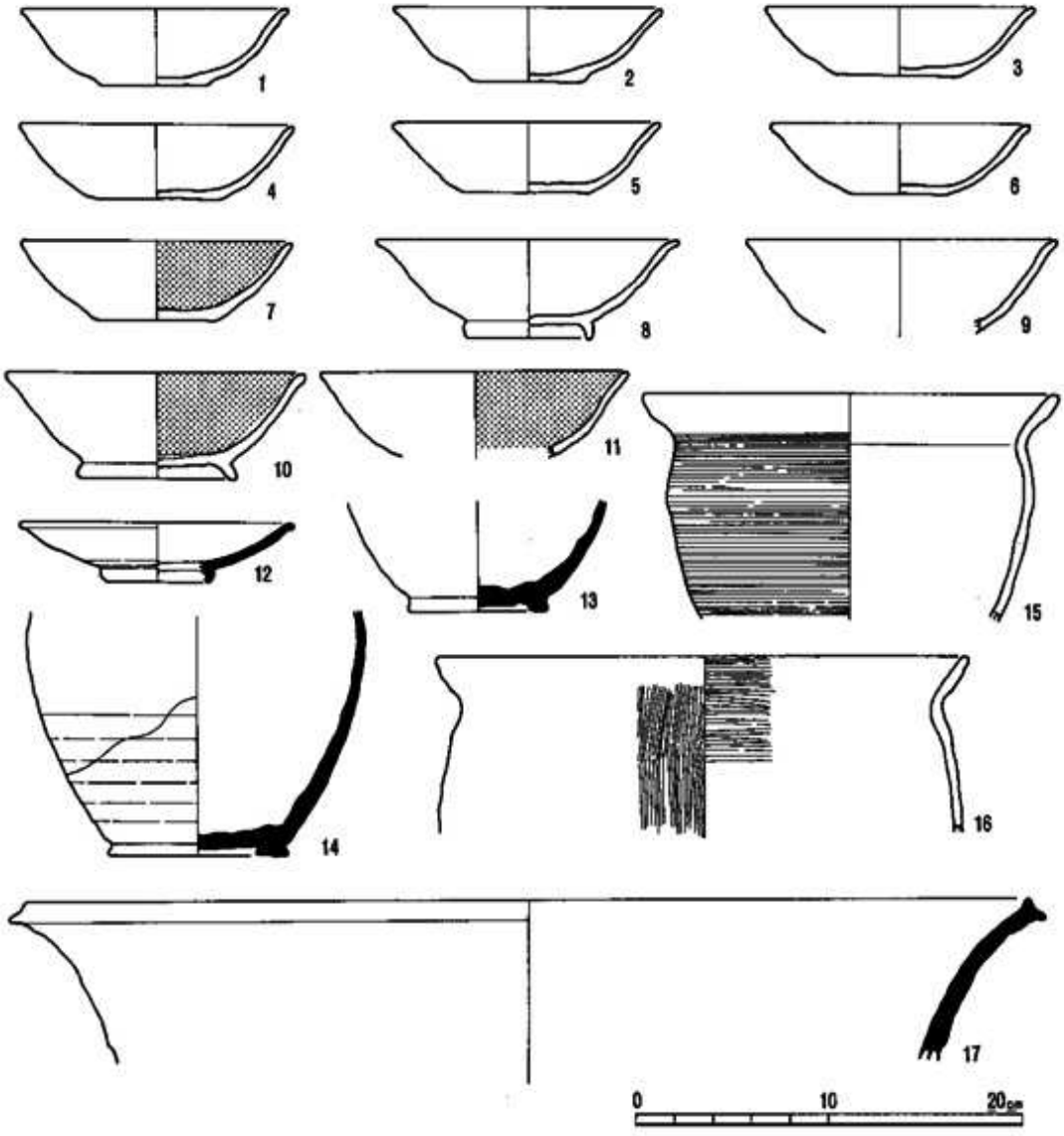


図9　2号住居址出土遺物実測図

器Aである。8・9は土師器椀で内面は杯AⅡと同様にコテ状の工具によって仕上げられている。この中で8は高台が断面三日月型になっている点など、灰釉陶器の椀の器形に非常に近い。10・11は黒色土器Aの椀である。黒色土器Aは7もふくめて内面のヘラミガキは粗いが、口縁部は横方向それ以下は放射状になされている。12は灰釉陶器皿Bで、釉は刷毛塗りで体部下半をロクロヘラケズリで仕上げている。口縁端部は小さな玉縁状に仕上げられており、高台は断面三日月型である。東濃窯産で光ケ丘1号窯式である。

貯蔵具は13・14と17である。13は須恵器長頸壺の底部で、焼成はよくなく赤褐色をしている。

14は灰釉陶器の長頸瓶で上半を失っている。下半をロクロヘラケズリで仕上げ、やや緑がかった釉を刷毛塗りしている。東濃窯産光ケ丘1号窯式である。17は須恵器の甕の口縁部である。

煮炊具は15・16である。15は土師器小型甕で全体をロクロによって仕上げ、外面にはカキメを施す。16はいわゆる長胴甕である。外面は頸部以下を縦方向の刷毛調整をしており、現存部分で2段が確認できる。内面は口縁部から頸部にかけてを横方向の刷毛調整、それ以下は縦方向のナデが施される。

3）3号住居址（図10、11）

01トレンチの南端に検出された。ローム層に暗褐色土が落ち込んでおり、4.5m×5.0mのやや横長の正方形プランを呈する。北東コーナーを2号土壙に切られ、西壁で3号土壙を切る。検出面が大変低く、特に東側ではほぼ床面のレベルであった。カマドは東壁を掘り込んで構築されているが、低い検出のため火床だけが確認された。火床は東壁を掘り込み床面を大きく掘りくぼめて構築しており、良く焼けて焼土が厚く堆積していた。中央奥壁寄りに焼けて風化した円筒形の花崗岩が横たわっており、支脚石と考えた。また、付近にはいくつか角礫が転がっており、石組カマドの残骸であろう。床はローム上面を利用しており、中央部ではカチカチに硬化していた。床下からピットが検出されたが、いずれも不整形で付属施設などとは考えにくい。

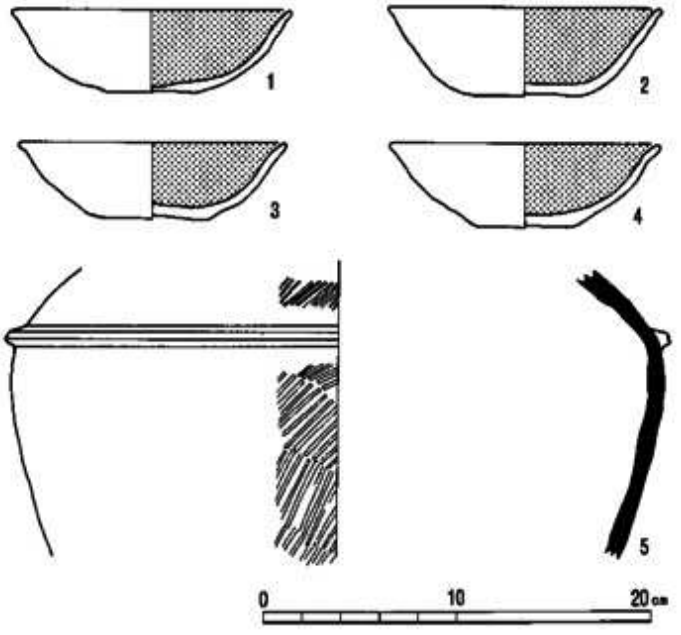


図10　3号住居址出土遺物実測図

遺物出土状況は、覆土が少ないこともあって、ほとんどが床面付近の出土であったが量的には少なかった。カマド左脇床面上から黒色土器A杯の半完形が2個体、同じく南西コーナーから鉄鏃が1点出土した。

遺物：1～4は黒色土器A杯AⅡである。焼成はよく薄手で外面は灰褐色である。ロクロナデで全体を仕上げたのち、内面をヘラミガキし黒色処理している。底部には糸切り痕が残されている。ヘラミガキの方向は口縁部は横方向それ以下は放射状であり、比較的丁寧である。3・4は内面中央の盛り上がった部分が摩耗しており、使用痕と思われる。5はいわゆる須恵器凸帯付四

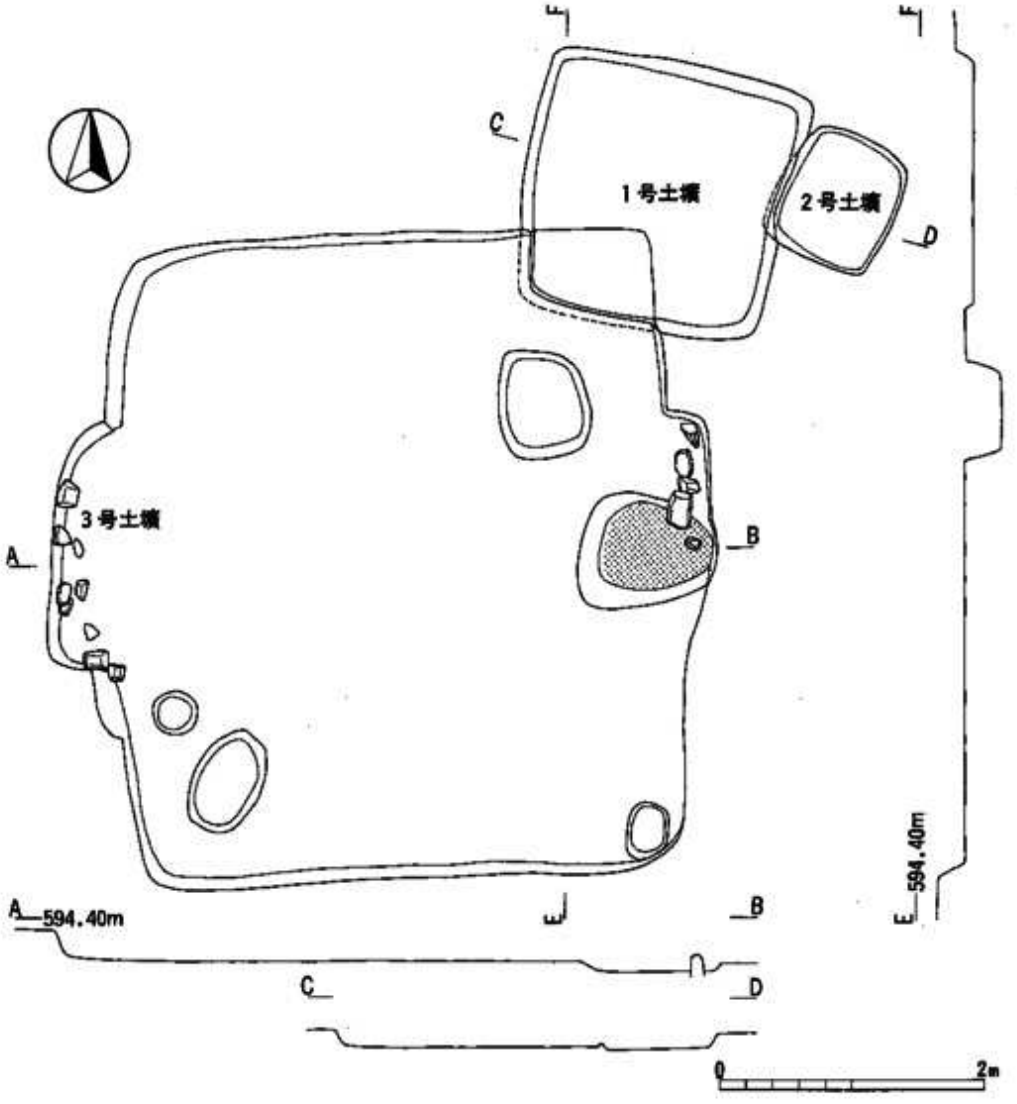


図11　3号住居址・1～3号土壙実測図

耳壺であり、「耳」の部分はない。外面は斜めのタタキをおこなった後、一条の隆帯がつけられている。

4）1号掘立柱建物址（図12）

01トレンチで検出され3号住居址の北に位置する。ロームにロームブロックのたくさん混入した暗黄褐色土の落ち込みとして検出した2間×5間と大規模の東西棟建物である。いずれの柱穴も径50～80cmの円形の掘り方をもち、深さも20～40cmでローム層にしっかり掘り込んでいた。梁行は西側はほぼ200cm等間隔で2間なのに対して東側は中柱的な柱を加え不揃いの3間であ

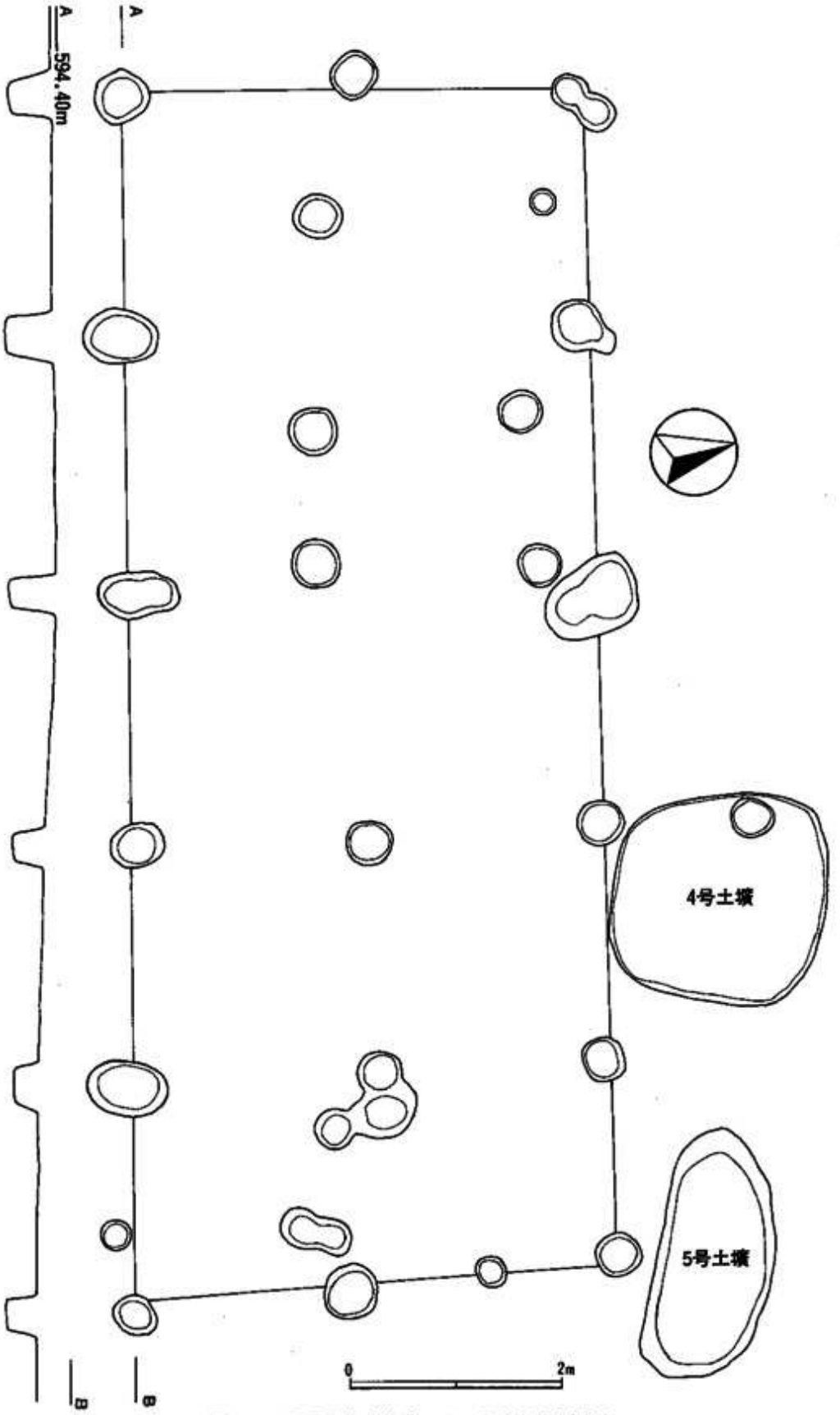


図12　1号掘立柱建物址・4・5号土壙実測図

る。桁行は210cm 前後で揃っている。総柱の建物と考えたいが、西側部分は位置がずれるので束柱の可能性もある。付近にはこのほかにもいくつかピットが存在するが、切りあいや立て替えを含め性格を明らかにすることはできなかった。

遺物は土師器の小片がわずかに出土したのみで、帰属時期などは特定できない。また、南側の隣接する地点で、炭化したトチの実が出土したが、上面からの掘り込みに入っていたと思われ、本址と直接関係は持たない。

5） 1号土壙（図10）

01トレンチでロームへの暗褐色土の落ち込みとして検出された。西側で2号土壙と切りあい、トレンチによる土層観察の結果、本土壙のほうが新しいことが確認された。一辺約1 mのきちんとした方形プランで深さは10cm 程と浅い。底面は平坦だが軟弱である。遺物は土師器細片がわずかに出土したのみである。

6） 2号土壙（図10）

01トレンチで3号住居址と切りあう遺構として検出され、プランの精査の結果住居址を切ることが明らかになった。東側は1号土壙に切られる。ローム層に落ち込む暗黄褐色土の覆土はロームブロックを多量に含む。一辺2 mの正方形プランを呈し、壁はまっすぐ垂直に立ち上がる。底面は平坦だが全体に軟らかい。遺物出土状況は住居址と切りあう南西部で散在したほかは、まったく認められなかった。いわゆる中世の竪穴状遺構と考えたい。

7） 3号土壙（図10）

3号住居址の検出中、西壁が不整形であるので精査したところ切られ残りの土壙の存在が明らかになった。東半分を切られているが、200cm×80cm 程の楕円形プランが想定できる。角礫の混在する暗褐色土の覆土には、土師長胴甕の破片がいくつか見られたがそのほかの遺物出土はなかった。

8） 4号土壙（図12）

掘立柱建物址の検出作業中にその北側に接して検出された。1号土壙と形状・規模・軸方向等が類似する。覆土から土師器細片が少量出土した。

9） 5号土壙（図12）

4号土壙と同様にして検出された。120cm×60cm の楕円形プランを呈し、やや凸凹のある底面は軟弱である。遺物はまったく出土しなかった。

10）１号溝址（図13、14）

03トレンチでロームに掘り込む暗褐色土の大きな落ち込みとして検出された。調査の日程から、断面観察による規模や埋没状況の確認とおおよそのプランを把握することを重点とした。平面プランは少し北に振るが東西方向から真南にほぼ直角に屈曲しており、現地形で一段高い畑の畦畔とだいたい一致する。トレンチにかかる部分での斜めの断面観察のため、溝の正確な形状がとらえられないが、北側の東西方向に走る部分は幅３ｍ程度で、南へ向きを変えるとやや幅が狭くなる。深さも同様に北側部分がやや深い。

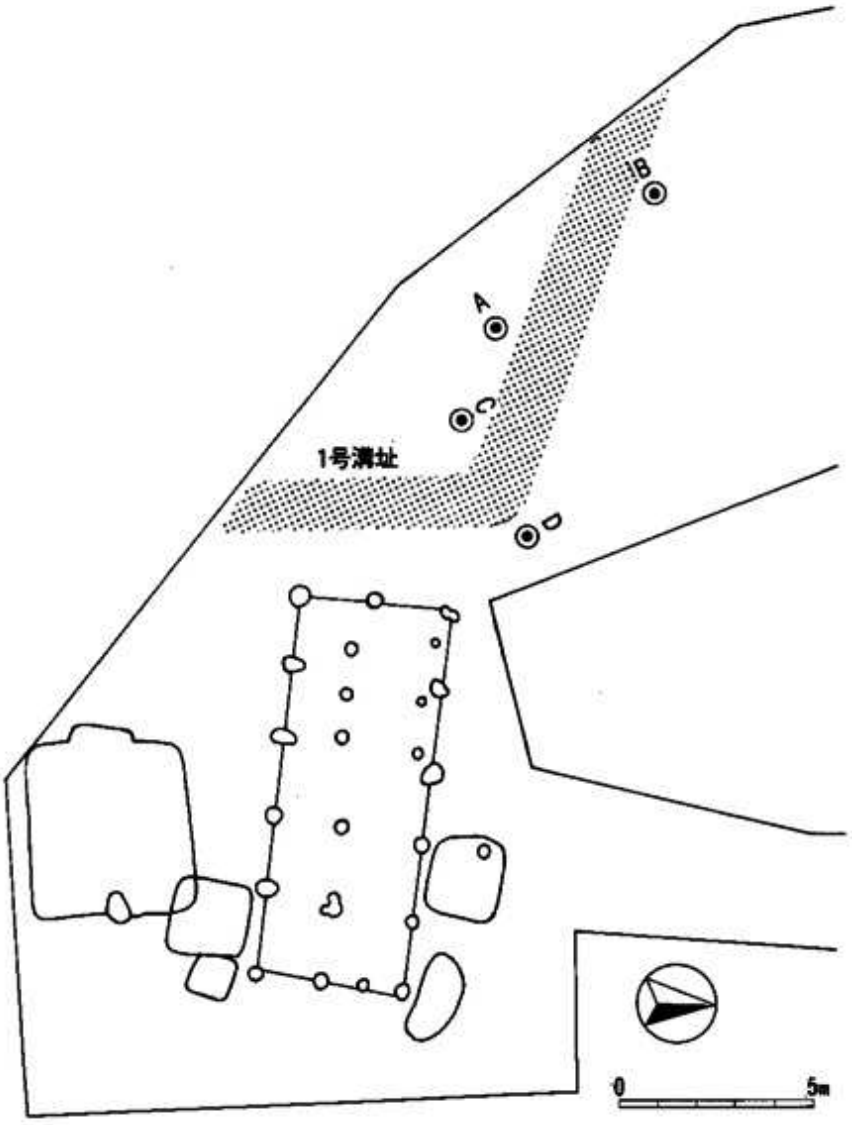


図13　１号溝址位置

森義直氏に助言を頂きながら土層断面の観察を行なった。地山のロームに接する底部にかなり厚い鉄分沈着層が見られること、非常に薄い鉄分を含む混ローム暗褐色土層が互層になって堆積していることから、溝内は常時滞水していたと想定できる。そして、そうとう溝が埋まった段階

で埋め立てられて、現状に近い地形になったと思われる。断面の形は底の狭くなる「V」に近い「U」字を呈しており、一部崩落したらしい土が存在する。また、屈曲する内側の斜面に礫がいくつか見られ、土止めのような施設も考えられる。

溝の底部近くから常滑あるいは中津川産と思われる中世陶器片が1点出土した。これ以外に遺物の出土はなかった。

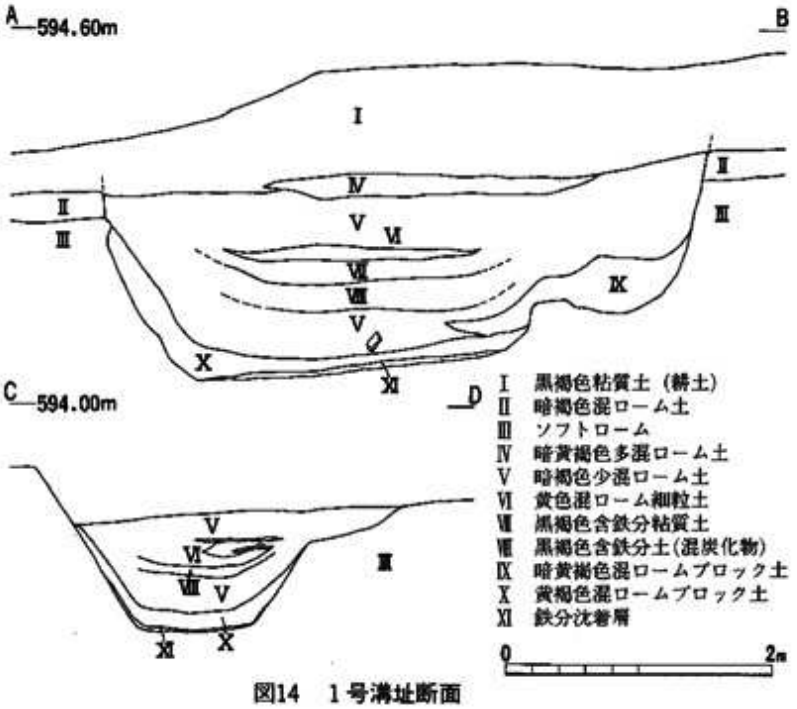


図14　1号溝址断面

いずれにしても断片的な調査にとどまっているので、不明点が多く全体を明らかにできなかった。

（百瀬新治）

第3節　遺構外出土の遺物

表面採集での遺物を含め、本遺跡から出土した遺物について簡単に触れておく。

縄文時代の土器片がいくつか出土した。細片で細かな内容は明らかにできないが、中期のものが摘出できる。奈良・平安時代の遺物はかなり多い。検出された遺構の時期とほぼ同様の内容を呈する。中世の遺物としては、東海地方から搬入された陶器片、かわらけ・内耳土器片に混じって、中国産の青磁片・北宋時代の銅銭が出土しており、本遺跡の性格に関係した遺物といえよう。近世の陶磁器の破片もいくつか出土しており、この遺跡が長い間の複合遺跡であることを物語っている。

（百瀬新治）

第4章　結　　語

田多井氏の居館跡として伝承されてきた地点の発掘調査であったが、古代から中世にかけての貴重な成果をあげることができた。

まず古代であるが、西山山麓での数少ない集落址の発見ができた。最近松本平北部では、隣接する穂高町矢原遺跡群をはじめ豊科町の古窯址群、大町市の一連の遺跡調査などにより、考古学を通しての古代の歴史的状況が明らかになりつつある。しかし、北アルプス山麓西山地帯では、有明古墳群などの調査が一部実施されているのみで、古代の集落址などの調査は皆無であり、その実態はまったく明らかになっていない。今回の調査で、わずか3棟とはいえ竪穴住居址と掘立柱建建物址が検出され集落の一部を明らかにできたことは、この地域の古代史解明の第一歩となると考える。堀金村としては岩田天神遺跡の該期集落址調査に次ぐものであり、集落相互の関係などを考えることで、当時の景観を具体的に理解することにもつながるであろう。

個々の遺構のうち特に注目されるのは、大規模掘立柱建物址である。2×5間と当時の建物址としてはかなり規模が大きく、さらに東西棟であることもこの建物址の性格を暗示しているように思える。残念ながら今回は集落全体からすればほんの一部の調査にとどまり推定の域を出ないが、延喜式に見える『多々利牧』と『田多井』の関係を考えるうえでも、本遺跡は相当の規模の集落が予想される。本遺跡のきちんとした調査がいっそう必要となった。

次に、竪穴住居址出土の土器について触れておきたい。2・3号住居址出土の土器は、最近発表された原明芳氏の区分案によると、その器種構成から平安時代食膳具3区分の第2段階に位置する。いわゆる礎器指向性の器種を中心とした構成の段階である。年代を与えるとするならば、伴出した灰釉陶器より9世紀後半とすることが妥当であろう。ただし、2号住居址と3号住居址は同時期でない。2号住居址のほうが杯AⅡの中の土師器の割合が高くなっており、より新しい様相を示している。軟質灰白色の須恵器を注意したい。還元炎による焼成の可能性が強いが、非常に土師器に近く見分けが付きにくいものも存在する。調整も土師器とほとんど同じである。このことは軟質灰白色の須恵器から土師器の生産へ、という方向性を裏付けていると考えることもできよう。

田多井氏居館跡の存在との関連を強く感じさせる、中世の諸遺構の検出も大きな意味をもつであろう。検出できた遺構は、ほぼ直角に曲がる溝と大小のいわゆる竪穴状遺構である。溝は、幅2m以上深さ約2mと大規模で、断面が『V』の字に掘り込まれており、堀の跡と考えたい。さらに、この溝が『との畑』の地字の残る一段高い畑の畦畔とほぼ一致すること、溝の底近くから中世常滑産陶器片が出土したことは、居館跡の伝承が具体的に示されたと言える。竪穴状遺構は、時期の特定ができない。しかし、切りあいや覆土、他遺跡の遺構との比較などで、中世に帰属するとしてよいと考える。佐久市教育委員会が発掘調査した中世城館跡大井城の調査で、城内にたくさん見られた竪穴状遺構とは形状などに違いがあるが、参考にしたい点が多い。

以前に採集された遺物を含めると、本遺跡は縄文時代中期から近・現代までの複合遺跡であり、すでに何度も述べてきたが、遺跡の保護と計画的調査が急務である。この調査と合わせて、堀金村郷土史研究会会長宮下一男氏らの丹念な表面採集による踏査がなされている。この努力が実を結ぶような方向で本調査結果が生かされることを心より期待する。　（山田瑞穂）

そ り 表 遺 跡

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査にいたるまで

神沢遺跡に同じ

第２節　調査団の組織

神沢遺跡に同じ

第３節　調査の経過

神沢遺跡に同じ

第４節　調査の方法（図15）

広大な範囲を、確認調査を中心にして、そり表遺跡の全体像をつかみたいという目的にそって方法を考えた。まず、周知の遺跡として範囲指定されているそり表・なかじま地籍については50ｍ方眼に試掘坑を設定し、地層の堆積状況や遺構の分布状況をつかむことにした。試掘坑は２ｍ四方を原則とし、重機によりできるだけ深く掘り下げて調査することにした。約４万５千m^2の範囲に53の試掘坑が設定された。次に、遺跡の西側に等高線にそってトレンチを入れ、あるいは試掘坑を入れて遺跡の範囲を確認した。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

本遺跡は田多井集落の東方に広がる水田地帯から田尻集落にかけての広大な一帯に展開する。この地帯は、南の黒沢川と北の烏川の扇状地の扇端部に位置する。したがって、田多井古城下遺跡よりは一段低く、なだらかな東向き傾斜面となっている。深沢は現在は用水路となって流れの位置を変えているが、遺跡のほぼ中央を走る東西方向の窪地がかつての沢の位置を教えてくれている。遺跡の西にかつて弁天池が存在しコンコンと水が沸き出していたように、湧水帯であり試掘坑からはかなりの湧き水が認められた。

第２節　歴史的環境

田多井古城下遺跡の項で記したように、ここの水田には方画地割がみられ古い地字名が残っている。本遺跡は古くから水田耕作の際などに土器や石器が採集されてきた。昭和34年２月、遺跡西部分の農道の改修と土砂採取の際、縄文時代中期の土器片が多量に見つかったという記録がある。さらに、田尻地区山口幸雄氏宅地からほぼ完形の埋甕が発見され、遺跡範囲の大きさと縄文時代の集落の存在の可能性などで注目されてきたのである。遺跡の西方や南方の小高い部分にも縄文時代の遺跡や遺物採取地が点在しており、全体が大きな遺跡群の様相を示している。また、遺跡西方の弁天池付近から、本村唯一の弥生時代赤色塗彩土器片が出土したというが、現在遺物などははっきりしない。

（百瀬新治）

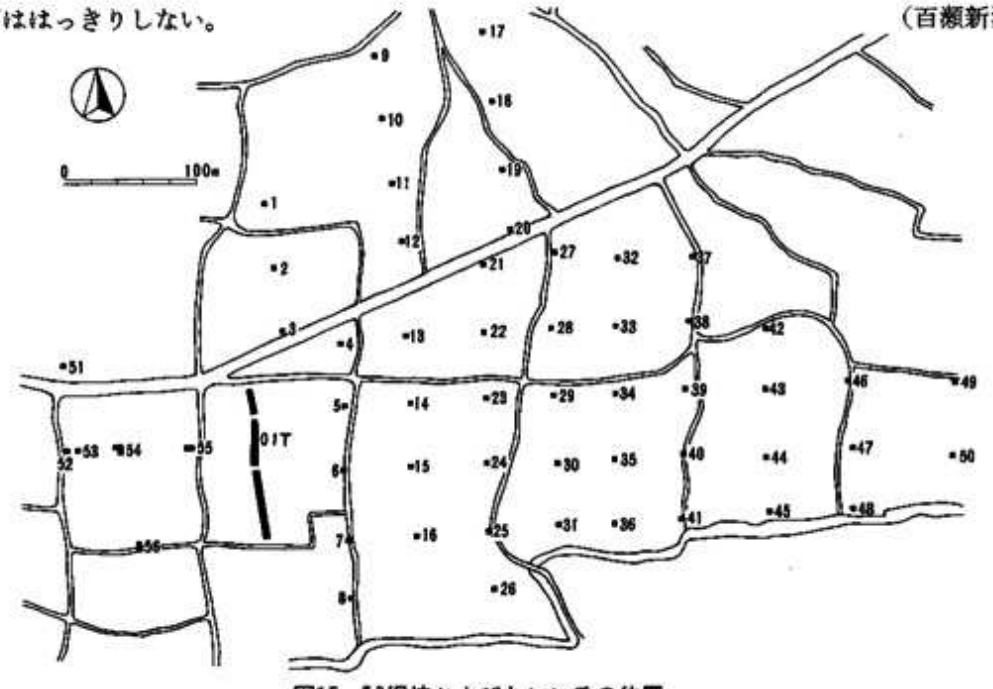


図15　試掘坑およびトレンチの位置

第３章　遺構と遺物

第１節　土層堆積の状況（図16）

広大な範囲に試掘坑を入れているので不明確な部分も多いが、基本的な層序は以下の状況で堆積していると思われる。

Ⅰ層―現耕作土、Ⅱ層―茶褐色砂質土(礫を多く含む場所あり、最大２面の水田面確認)、Ⅲ層―黒褐色含礫土（小礫が多い、水田面あり)、Ⅳ層―暗褐色砂質土（炭化物･礫を含むことが多い)、Ⅴ層―ソフトローム・砂礫

遺跡の北側部分は試掘坑10・18の断面に見られるように、Ⅰ～Ⅳ層の堆積が薄く、烏川の氾濫による礫の厚い堆積が見られる。中央の４・６・22・28・38の試掘坑42ではⅣ層から重なるようにして多量の土器片が出土し、以下の土層を確認することができなかった。南側の７・30の土層は礫がほとんど入らずⅤ層にロームが存在する。西側部分では全体的に堆積が厚くなり、01トレンチの南側（01Ｔ－２）地表下約２ｍから竪穴住居址が検出されている。

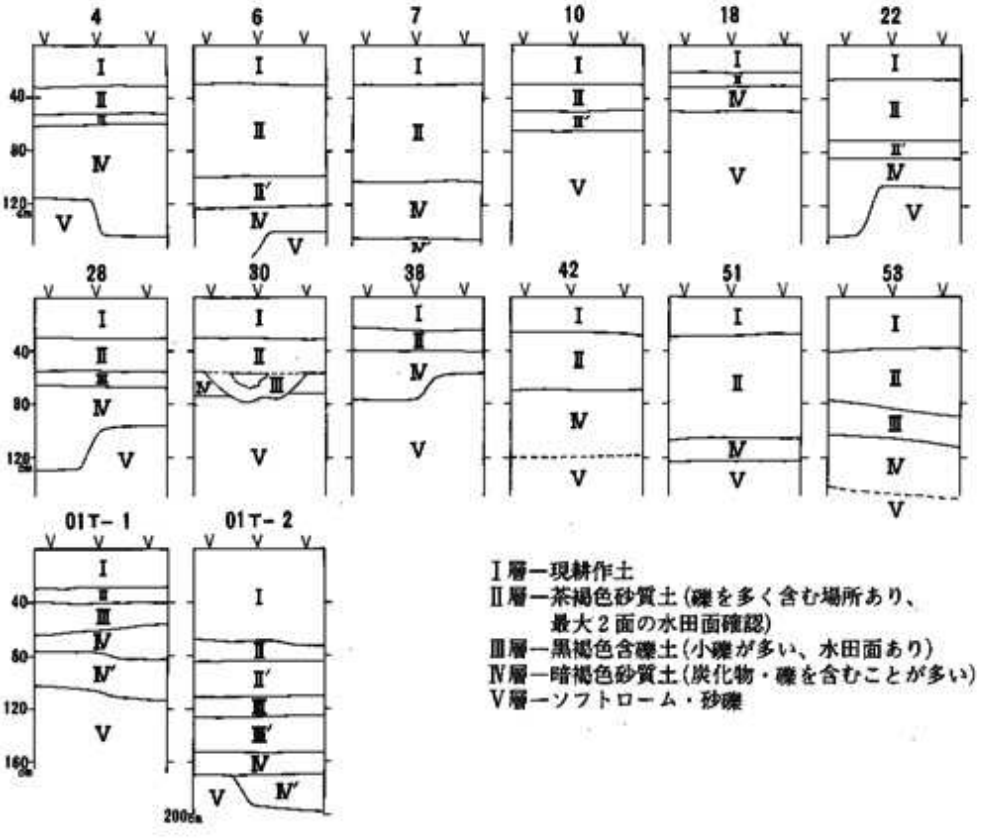


図16　試掘坑の土層堆積状況

第２節　遺構と遺跡の広がり（図17）

トレンチと試掘坑のうち、そのほとんどから遺物が出土し、半分以上で遺構の可能性のある落ち込みが発見された。

まず縄文時代であるが、中期の土器片は遺跡のほぼ全域から出土する。遺物の出土する層位はⅣ層であり、この層から落ち込む遺構の数も多い。特に東側部分では中期後半の土器片を主におびただしい遺物量で、過去に埋甕が発見された場所と近接することを考え合わせると、この一帯にかなりの集落址が存在すると思われる。さらに今回は確認できなかったが、その東方にも遺跡が広がっていくことは確実といえよう。これに対し西側部分では中期から後期にかけての遺物が分布する。堆積が厚いことから遺構は深い位置に存在することが多いが、竪穴住居址らしい大きな落ち込みや埋甕もいくつか発見されており、ここも広い範囲の集落址となる。しかも中期初頭から後期にかけての複合遺跡であり、２面以上で遺構を検出する必要がある。

弥生時代の遺構が遺跡南部の試掘坑にかかって発見された。削平されたⅣ層上面での検出であり、Ⅲ層から切り込んでいるととらえられた。この部分は深沢に沿った一段と低い場所で、ここに弥生中期前半の遺跡が存在しており、きわめて重要な一角と考える。

奈良・平安時代の遺物が中央部を中心に散在している。Ⅱ層からの出土と思われピット状の落ち込みが見られる。規模などは不明であるが該期の集落も確実に存在するであろう。さらに中・近世の陶磁器片も僅かながら出土しており、注意する必要がある。　（百瀬新治）

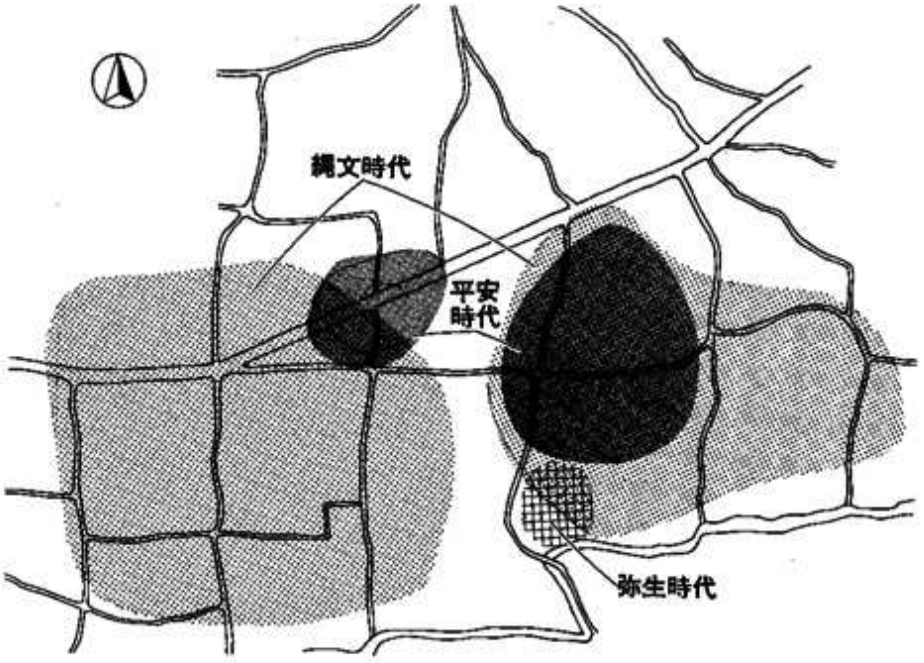


図17　時代別推定遺跡範囲

第３節　出土遺物

１）縄文時代

土器（図18、19）

中期初頭の土器が南側部分で出土している。２・３は五領ヶ台Ⅱ式併行（梨久保式）の土器であり、２は口縁の内外だけに文様をもつ浅鉢、３はいわゆる踊場系の深鉢である。４～６は勝坂式の後半（藤内～井戸尻式期）に帰属する。特に４は松本平西山沿いに多く見受けられる土器である。７・８のように中期後半曽利式期の土器が多出している。このほか焼町式土器と思われる破片が１片認められた。また１は01トレンチで埋甕として出土した、ＲＬ縄文を全面に施した大形の深鉢である。

後期の土器も西側を中心にかなりの量におよぶ。称名寺式から堀ノ内式土器もわずかながら出土している。01トレンチの北側部分を中心に加曽利Ｂ式土器（９～13）がまとまって出土している。

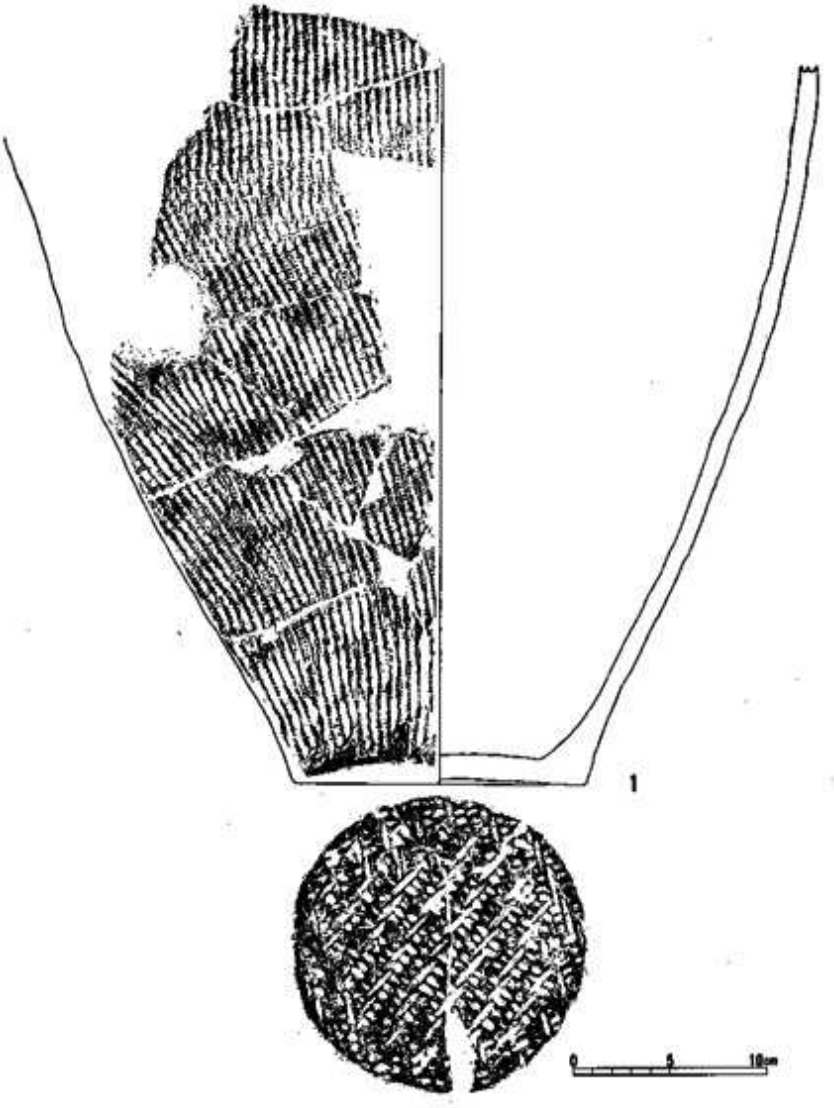


図18　出土土器拓影(1) 1：4

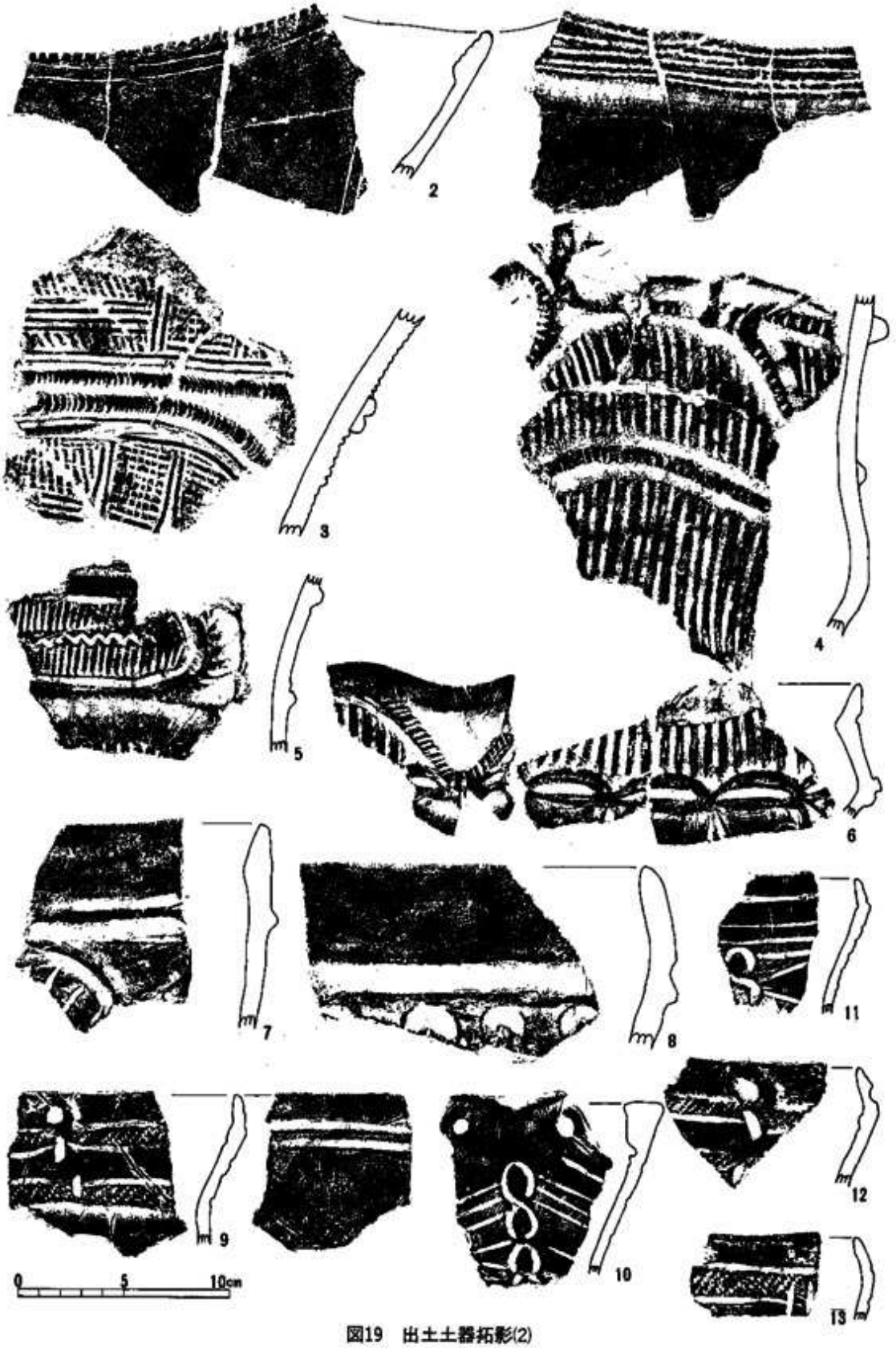


図19　出土土器拓影(2)

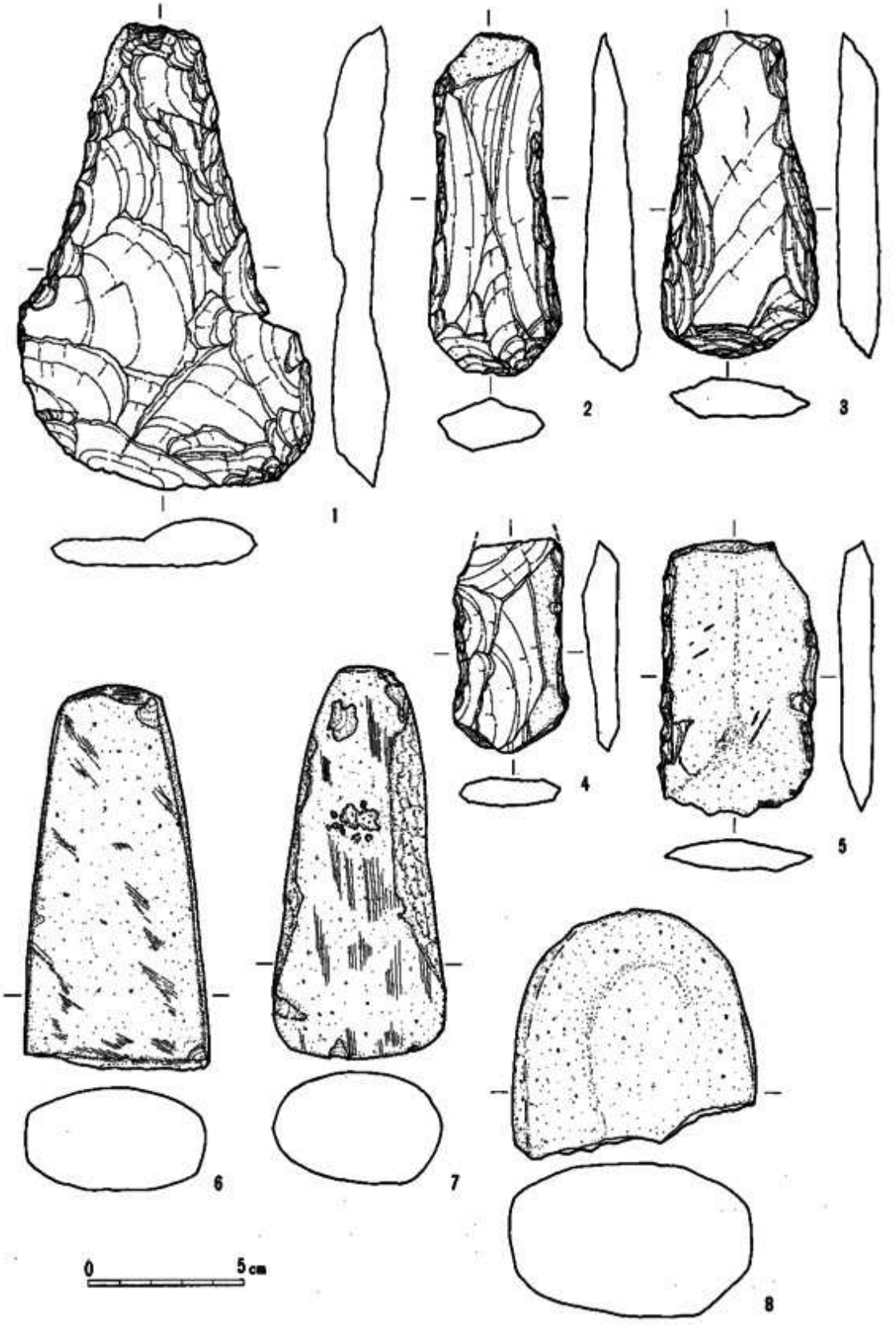


図20　出土石器実測図(1)

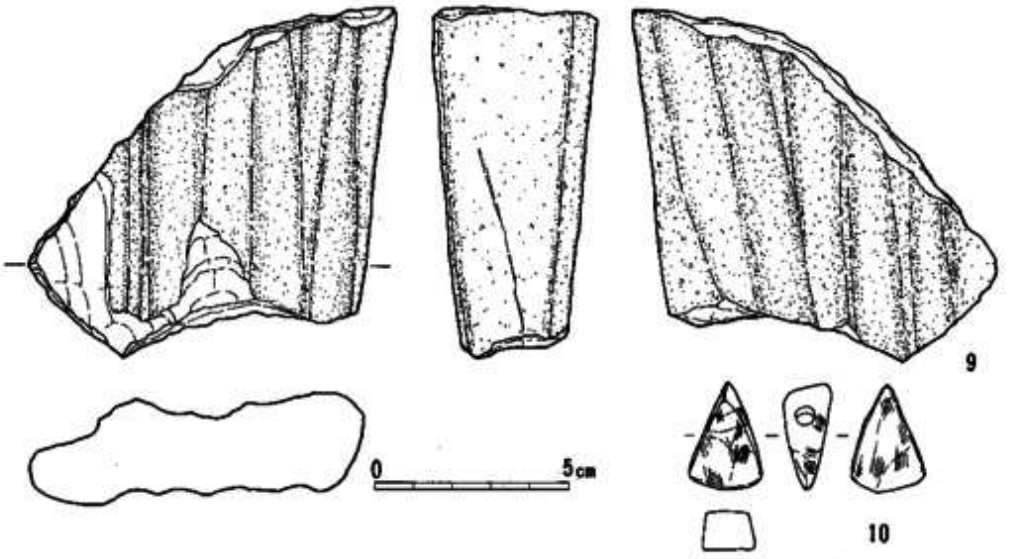


図21　出土石器実測図(2)

石器（図20、21）

1～5は大小の打製石斧である。安山岩と頁岩が使われている。6・7は磨製石斧であり、7には着柄痕が見られる。8は安山岩製の磨石である。9は滑石製石製品で、ペンダントと想定できる。10は安山岩製の有溝砥石である。（寺内隆夫）

2）弥生時代

試掘坑30のⅣ層最上面で弥生式土器の胴部下半が、北東方向に傾いたまま上を平らに削り取られたような状態で出土した。土層断面の観察でⅢ層の落ち込む土壙の存在が明らかになり、Ⅲ層から切り込んだ土壙が上面を水田耕作で削平されたと考えた。松本市針塚遺跡の例のように再葬墓の可能性も考え土器の中の土を水洗したが、それらしき痕跡は認められなかった。

土器は弥生中期の壺の胴部から下と思われ、表面は貝殻の腹縁でつけられたと思われる条痕が施されてい

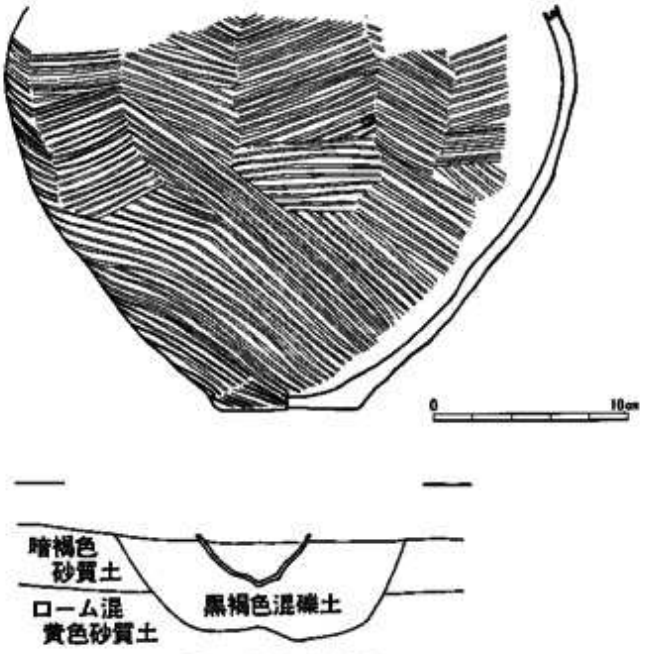


図22　弥生式土器実測図

る。胴部下半までは羽状を意識した施文をしているが、底部に近づくと右下がりの施文だけになるなど、やや粗い施文方法が目立つ。長石粒など砂粒の多い胎土と、水分の多い土中に長時間埋まっていたことによる保存状態の悪さから、内面の剝離が進むなど風化が見られる。

東海地方あるいは南信の条痕文土器とはやや趣を異にする感があり、木曽や岐阜県を含めて、今後の比較検討が必要である。

3）平安時代以降

量は多くないが古代から中・近世にかけての遺物が出土している。

古代に属するものとしては、土師器・須恵器・灰釉陶器の破片が、いずれも細片で全体の形のわかるものはない。時期の判明したものはすべて平安時代中頃に帰属する。

陶磁器片が数点出土している。試掘坑７から出土した13～14世紀中国龍泉窯系のしのぎ蓮弁文がほどこされた青磁片が注目される。（百瀬新治）

4）既出資料

本遺跡で今までに採集されている遺物は、土器を中心に相当の量にのぼる。そのうち実測によってほぼ全体が復元できる４点を資料紹介したい。

１は口唇部直下を２ cm ほど無文帯にして横位のＸ字状に割り付けた口縁部文様帯とＲＬ縄文を施した胴部文様帯からなる。口縁部文様帯は隆帯上に刻みを入れ、三角と菱形の区画内へは縦の沈線を入れ、間をランダムに刻むなどしている。底部はいわゆる算盤玉状になる。勝坂Ⅳ式の様相をもつ。

２は山口宅から出土した、埋甕と想定できるほぼ完形の土器である。口縁に４cmくらいの無文帯をもち、横位の文様帯と４単位の胴部文様帯から成り立つ。曽利Ⅱ式併行の唐草文系土器である。

３は２と同じく曽利Ⅱ式併行の土器である。口縁部文様帯、頸部無文帯、そして４単位の胴部文様帯で構成されている。２と同様に隆帯を付けてから地文を棒状工具で引いている。

４は口縁部文様帯が欠けているが、頸部文様を二つに分け、上半を半隆起線で四角く囲ったパネルを、縦の割り付けで区切っている。区画内を三叉文や大形「コ」の字文で充填し、区画内周縁には刻みを入れる。頸部文様帯の下半は一周する文様帯で、沈線を刻み付けている。胴部文様帯は頸部文様帯の上半と同じパターンを繰り返す。パネルの間のすきまは肉彫りをするなど、この時期の特徴を良く示している。勝坂Ⅱ式（新道式）に帰属する。（野村一寿）

図23　既出土器実測図(1)

図24　既出土器実測図(2)

第4章　結　　語

堀金村ではもっとも広範囲で密度の濃い遺跡として注目されてきたそり表・なかじま両遺跡に今回初めて本格的な調査のメスが入ったのであるが、その結果旧来にも増して重要な遺跡であることが再確認された。

最初に遺跡の範囲であるが、今まで確認されていた田尻地区の農協倉庫を中心とする一帯に加え、西側に大きく広がりをもつことが判明した。田多井地区の弁天池の東および北まで遺跡が続くことは確実で、今回確認できなかった東側と南側の田尻地区へも広がると思われ、少なく見積もっても遺跡総面積は10万 m²に達することになる。

さらに、この広大な遺跡は縄文時代中期・後期、弥生時代中期、奈良・平安時代、中・近世にまたがる複合遺跡であることが判明したことは大きな成果と言えよう。すなわち縄文時代では竪穴住居址を含む濃密な遺構の分布が想定され、大規模な集落址の存在が認められたこと、弥生時代では松本平で最も古い段階の遺構と土器が発見されたこと、古代以降も遺跡が続くことが明らかになったこと、いずれもこの遺跡の重要性を示す知見である。

堀金村の大きな財産となった本遺跡を、今後どのように保存していくのかが大きな課題となった。特に今回の試堀の契機となったほ場整備事業に伴なう対応が差し迫った問題となる。土盛りによる保存という方向が協議の結果示され、これが完全に実行されることは遺跡の保護にとって最良と考えるので、関係各位の協力と努力を切に期待する。この遺跡が保存活用され、村民に生かされていくとき、堀金村は真の文化村として発展すると思う。今いちど本遺跡の保護を強く訴えたい。

最後に、秋の農繁期にもかかわらず調査に参加協力していただいた方々に深く感謝を申し上げる。

（山田瑞穂）

写　真　図　版

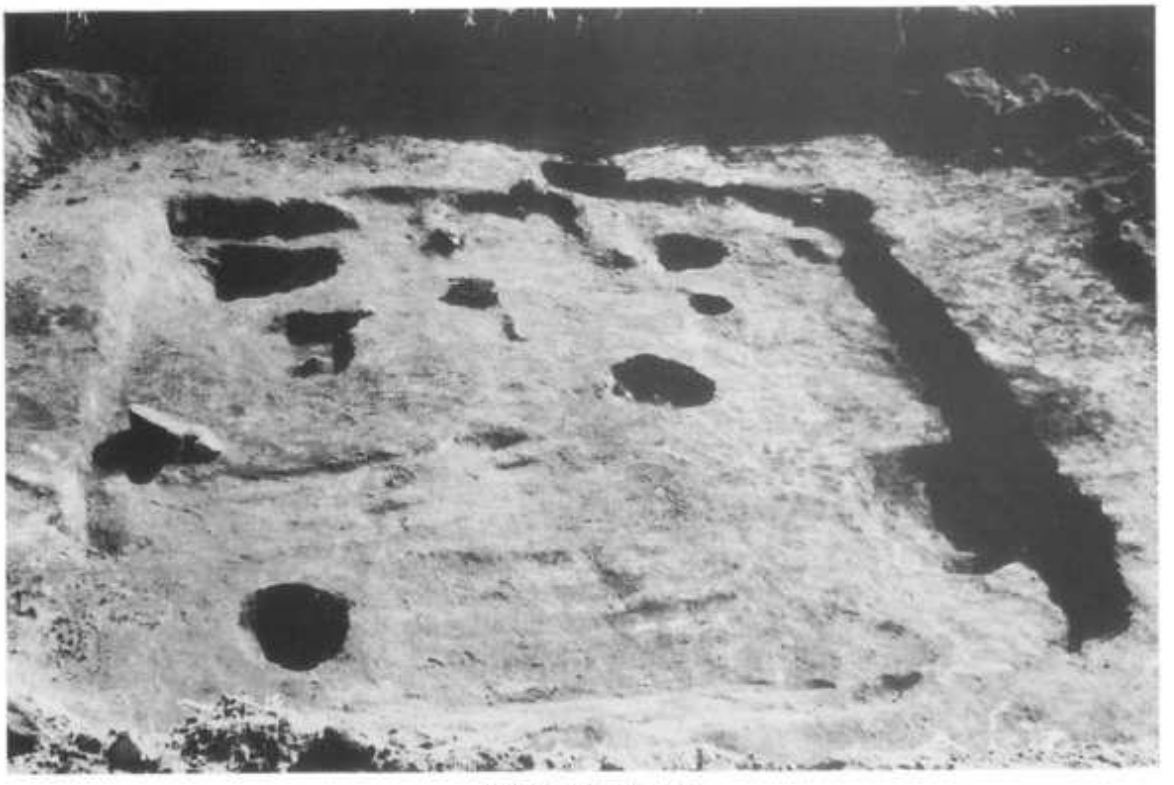
図版 1

神沢遺跡遠望（東そり表遺跡より）

遺跡中心部分

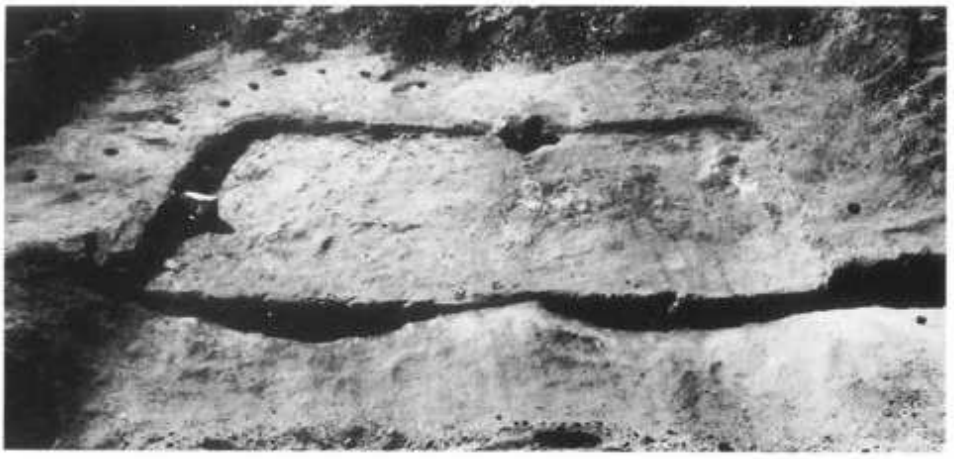
調査風景

田多井古城下遺跡遠景（東より）



2号住居址（西より）

図版 3



1号住居址（東より）

3号住居址（西より）

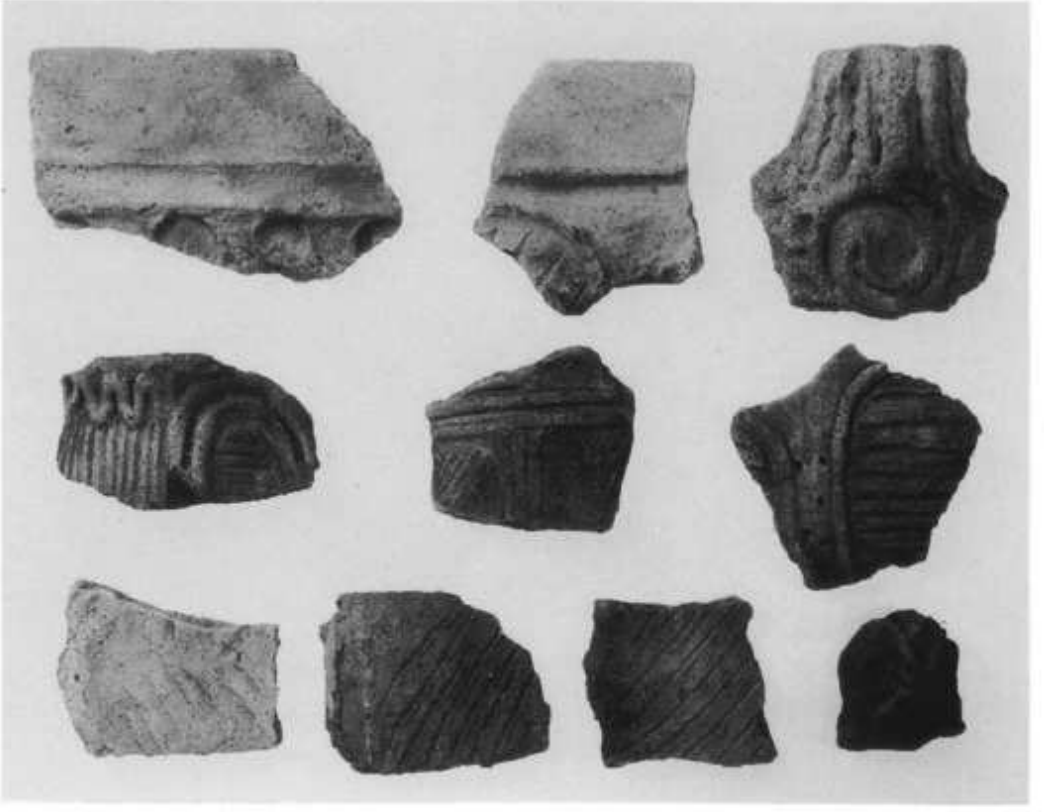
1号建物址（西より）

そり表遺跡遠景（北より）

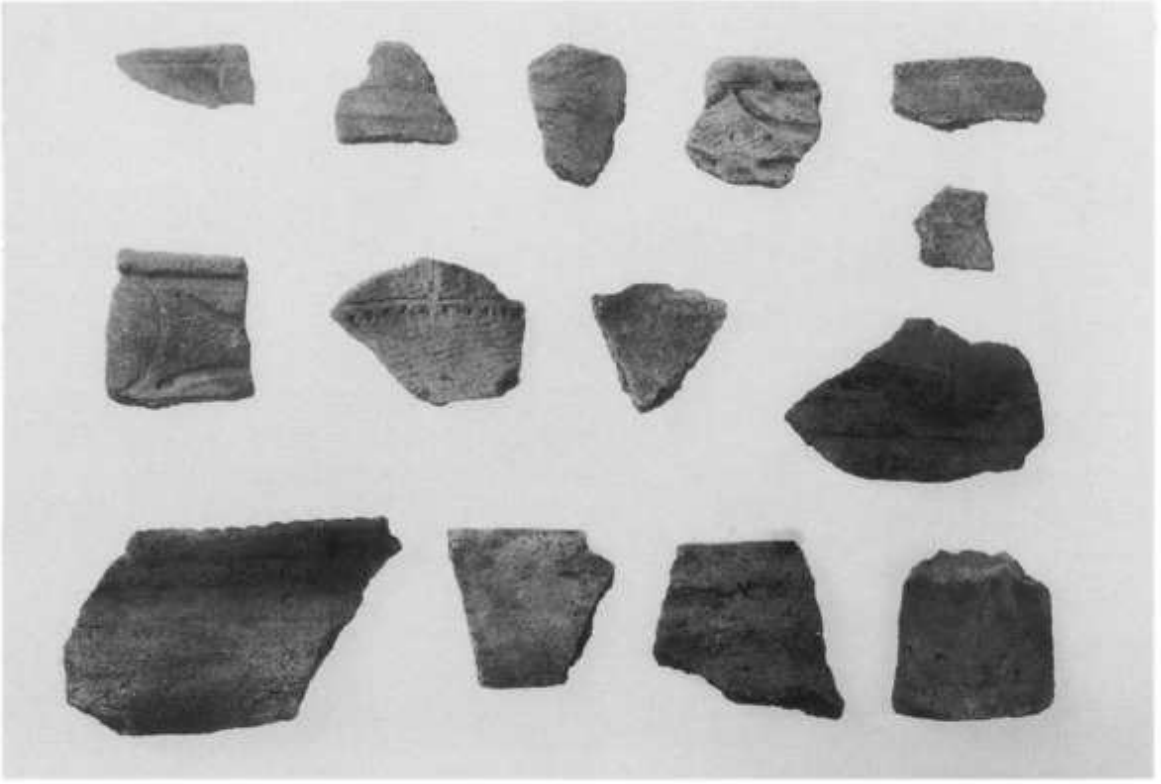
試掘坑の状況

弥生式土器出土状況

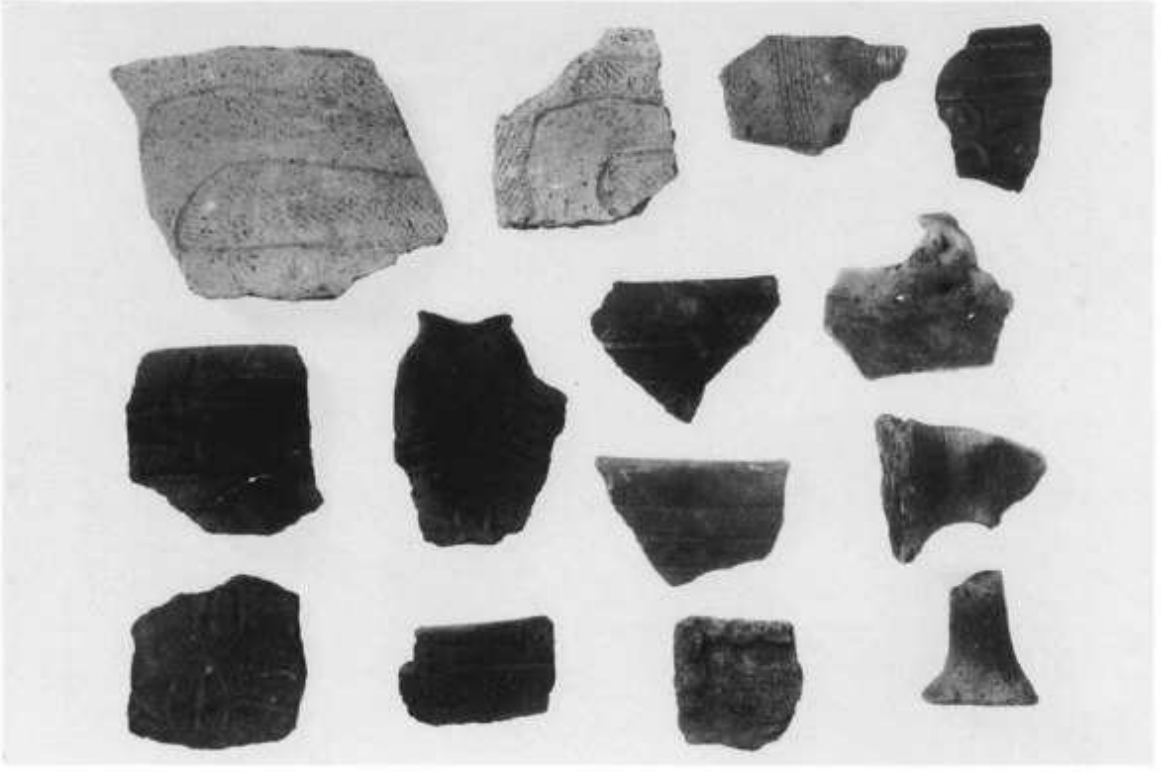
そり表遺跡出土土器（1：5）



そり表遺跡出土土器（1：3）



神沢遺跡出土土器（1：3）



そり表遺跡出土土器（1：3）

(1：3)

(1：2)

(1：1)

そり表遺跡出土石器・石製品

田多井古城下遺跡
2号住居址出土土器
（1：2）

田多井古城下遺跡
2号住居址出土土器
（1：2）

田多井古城下遺跡
3号住居址出土土器
（1：2）

堀金村の埋蔵文化財第１集

神　沢　遺　跡
田多井 古城下遺跡
そ　り　表　遺　跡

昭和63年３月25日印刷
昭和63年３月31日発行

編集発行　堀金村教育委員会

印　　刷　電算印刷株式会社